

第4回新城市地域産業総合振興条例審議委員会

平成27年2月24日（火）午後6時～午後8時20分
新城市勤労青少年ホーム2階 軽運動場

P	1	開会、あいさつ
	2	報告
	7	審議
	7	鈴木先生から会議の目的
	7	Aグループ
	22	Bグループ
	34	発表
	34	Bグループ
	35	Aグループ
	36	まとめ

○司会（加藤副課長） 皆さん、こんばんは。

定刻になりましたので、ただいまから第4回、新城市地域産業総合振興条例審議委員会を始めたいと思います。

始めるに当たりまして、副委員長の広瀬副市長、一言御挨拶をお願いします。

○広瀬安信副委員長 どうも皆さん、こんばんは。きょうは遅くからの会議ということで、皆さん、一日のお仕事、あるいはまたこれを終わってから仕事をされるというようなことかもしれませんが、大変、お疲れのところ御苦労さまです。

いろんなことを、今まで検討してきていただいたり、あるいは皆さんに議論していただいている中に、少しでもキラッと光るものがそれぞれの中で光っていたなというふうに思っているところです。

きょうは、今まで行っていただいたアンケート等の資料を出しながらさらに議論を深めていただき、この地域産業の振興に関わってくるこの地域の特性みたいなものが一つでも二つでもヒントとしてあることを期待しているところです。

きょうは鈴木先生にも、遠くから新城まで来ていただきましてありがとうございます。

それでは今後の進行につきましては鈴木先生をお願いしますので、よろしく願います。

○司会（加藤副課長） ありがとうございます。続きまして、委員長の鈴木誠先生に、御挨拶をお願いしたいと思います。

○鈴木誠委員長 皆様、どうもこんばんは。今、副市長からお話があったとおり、この間の積み重ねの中で、ようやく4回目を迎えることができました。

条例そのものは、さほど書くことが難しくなくてよく言われますけれども、問題はその条例の中に書き込んでいく文言、あるいはその文言に込める意味というのがすごく重要

になってまいりまして、特にこの新城で地域産業総合振興ということであってそこで何を指すのか。そして、地域の産業振興を達成する上でどのような具体的な手順が必要なのか、こういったところが実際に新城市にお住まいで新城市内の事業所に勤めている、あるいは市内にお住まいで名古屋や浜松のほうにですね、通い働いている人やあるいは若者たち、さまざまな意見を踏まえてつくっていかなくちゃいけないだろうというふうに思います。

今日は前回、ヒアリング調査の結果を元にして、グループごとでそこに込められた意味とか、あるいはそこから見出される課題であるとか、さらには何が必要なのかということについて幅広い視点で意見を交わしていただきました。

きょうはもう一つの調査の柱であったアンケートについて、ひとまず単純集計で出せるところまでまず用意させていただきました。それ以外の記述式の点であるとか、さらにどのような2点クロス、3点クロスをしてですね、よりそこから見出されるテーマをですね、引き出していこうという、このあたりをきょうの皆さんの議論を踏まえてさらに作業を進めていきたいというふうに考えております。

きょうはそういうことで、この地域産業総合振興条例策定のための基礎調査の柱のもう一つ、従業者の皆さんへのアンケート調査、この成果、結果を踏まえて議論をしていただくと思います。

一つはどのような、やはり住民がですね、どのような課題なり問題の指摘をしているということと、そこからどのような、今度は対策が必要なのか、このあたりはこちらに2本柱として、グループできょうは議論をしていただきたいという願いもあります。

限られた時間ではありますけれども、これからの時間、どうぞ積極的に意見交換をしていただけますように、よろしく願い申し上げます。

ます。

○司会（加藤副課長） ありがとうございます
ました。

○司会（加藤副課長）

それでは、ここからは次第に沿って進めて
いきたいと思います。

次第1番、報告事項のほうを事務局から報
告させていただきます。よろしくお願いま
す。

○事務局（川合課長） それでは次第に従
ってですね、前回の会議録、会議の要旨につ
いて御説明をさせていただきます。

こちらのA3の、済みません、一番後のと
ころになるかと思います。グループワーク、
グループ討議をしていただいた内容の部分
を、A班とB班の内容を説明させていただき
ながら、会議のほうの振り返りをさせてい
たいただきます。

まず、第3回の審議委員会では、分科会
でヒアリングについての内容を説明させて
いただきました。そして、こちらのほうにつ
きましては、前回、各委員さんから出して
きていただいた内容を少しずつ御説明させ
ていただきながら進めたわけなんです
が、実際にはそのまとめとして、今見て
いただいている分科会Aグループでは、
人口減少という部分の生活という部分
からお話をいただいた内容と、それから
産業という部分の内容としては、新城で
ブランディングというものがあるんでは
ないかというような内容をいただいで
おります。

Aグループのほうにつきましては、その
人口減少に関連する課題というものを
それぞれ放射状にこういう形で、右の上
のほうからいきますと、世代の内容とし
て若者を生かすとか、女性の社会復
帰というような形で、若者を活かすと
増やすというような形も考えられて
おりました。

それから、その右にいきますと、住んで

れたら家賃は無料というようなアイデア
までいただいてですね、空き家対策だ
とか空き店舗対策が必要ではないかとい
うような。要は、そこには買い物とい
う部分の内容が含まれているかと思いま
すが、そういう内容でお話をいただいた
部分もございました。

それから、左の下のほうにいきますと、
医療と福祉の充実ということで、どう
しても医療分野の充実が人口減少の課
題に対する一つの課題解決する方策で
はないかというようなお話をいただき、
それから交流人口というような形の中
で、新東名の高速道路のインターの活
用だとか、その下の高速道路網の整備
をいかに取り込んでいくかというよう
なお話をいただいた内容でございます。

それからその右にいきますと、宅地が
ないというような形の中で、土地利用
規制とか都市計画の内容の部分のことが
課題として挙げられているものでござ
います。

それから税の固定資産税の内容だとか、
無論働く場所というものの内容、そ
れからそこには逆にいう労働力不足
というような課題もあるんではないか
ということでお話をいただいで
おります。医療福祉の充実の中には、
それぞれのいろいろなアイデアを
いただいて、高齢者だとか、通院
だとか、介護というような内容まで
含めて、いろいろなアイデアを
いただいた内容かと思っております。

それから2つ目の産業の部分の内容とし
て、新都市のブランディングという
ものを考えるべきではないだろうかと
いうようなお話をいただいたものが
あります。

中小企業の元気をどう取っていくのか、
それから地域のオリジナルの内容で補助
金等の支援策、それから金融機関、
農協のバックアップの体制という
ものも、ブランディングには必要
ではないかというようなお話を
いただいたと思います。

それから、このブランディングの中には
農業と観光という分野も想定されて
ですね、観

光客の増加、それから売れる商品、それから楽しむ農業というような環境、それから特産品というような内容の観光分野、それから農業分野でのブランディングを図っていくべきではないかというようなまとめをいただいたと思います。

それから、Bグループのほうではですね、課題としては安心、安全という部分の内容が多く含まれていたかというふうに思います。ここには、やはりこのグループの内容でいきますと、右から2番目の下の部分の安心できるまちだとか、経済的に安全・安心というような部分のキーワード、そういうものが一番必要ではないかというようにお話をいただいております。

それからもう一つ、異業種の交流というような内容も、その課題として出されたというふうに思っておりますし、ヒアリング調査の中でですね、異業種間の交流をされてるか、されていないかというような内容からですね、されていないというような状況がありましたので、その辺が課題として取り上げられるのではないかということで、このBグループとしては、安心、安全という部分の内容と異業種の交流をどうやったら進めたらいいかというような内容をいただいたと思います。

今、異業種の交流の部分につきましては、右から2番目の上のところでですね、地域の連携という部分もありましょうし、産業の連携というような部分もありましたので、そういう異業種の分野、それから同業種の連携もここでは欠かせないのではないかというようにお話をいただいたと思います。

鈴木先生からはですね、このまとめという内容の中でですね、条例の中に掲げるべき内容という部分では、先ほども出た人口の話、それから連携の話をいただいたと思います。やはり、条例の中でですね、個々の事業の支援という部分とですね、そうではなくて、異業種だとか同業種の連携の部分の支援という

ものをどうやってとっていくのか。それから就業の魅力というものをもっと出すべきではないかというような内容もいただいたかと思っております。

最後の部分ではですね、今後、その条例をつくった後で、マスタープランというような新城市産業振興計画だとか、産業振興マスタープランというような実施計画をつくっていく必要があるのではないかというようにお話もいただいてですね、取組み、目標案としては、そういう目標を達成するに向けて取り組むべき重要な柱というものを、やはりつくっていくべきではないだろうかという話をいただき、そこには地域の貢献というようにお話もございましたし、それから金融機関とか、そのサポート、それから国の補助メニューの検証とか、そういう部分も考えていくべきではないだろうかというお話をいただいたところです。

それから、この新城市の地域産業の部分についてはですね、新城市の総合計画というものもございます。それから、その中には基本構想だとか、基本計画というようなものもございますので、そちらとのやっぱり整合もしっかりとっていくべき内容ではないかというようにお話をいただいたかというふうに思っております。

実際のお話では、今後、アンケート調査ができていく中で、その実態調査に即した形という部分で、前はヒアリング調査、今回はアンケート調査の部分から、どういうものが導き出されてくるかというのを、しっかりつかむべきだろうというようにお話をいただいたかというふうに思っております。

前回の会議の内容としては、そういう形で欠席者の方もお見えになったと思いますが、振り返りをさせていただければというふうに思います。以上です。

続いて、申しわけありません。次の「審議委員会に係る実態調査（アンケート調査の結

果概要について)」ということで、お話をさせていただけます。

皆様のところに、アンケート調査票という、この白い紙、㊦というふうに書いてあるものと、それからこちらの緑の紙のほうの、調査票のほうですね、これをちょっと見ていただきながら、お話を聞いていただけるとありがたいと思います。

まず、このアンケートの調査につきましては、ヒアリングに行った企業、商店主さん、また、農業関係の方もお見えになるかと思いますが、そういう方の従業員さんをお願いできるかどうかの確認をさせていただいて、実施をさせていただいたということでございます。ですので、企業様につきまして、各ところをお願いした回答数が856の方から回答をいただいております。

この方たちの、こちら緑のほうを見ていただきますと、Q2という問いがございます。あなたの年齢、性別を記入してくださいということで、回答者の年齢別ではですね、10代というのは18歳と19歳の方が1.8%。それから20代ということで、20歳から29歳の方が9.3%、というような形で、一番多い年代がですね、40歳代の29.9%という内容になっております。以下、最高年齢の方は81歳という形で回答を寄せていただいております。

それから、こちらの表のほうも見ていただくとお分かりいただけるかと思いますが、回答者の性別としては、男性が56%、女性の方が42%ということになりまして、男性の方が480人、女性の方が356名、未記入の方が、ここに不詳と書いてある2%というふうに書いてある方が、20人というような形になっております。

続いて、あなたのお住まいはどちらですかということで、新城市内という方と、市外という形の回答はですね、こちらの表でいきますと、市内という方が73%、市外という方

が27%で回答をいただいたというのが基本の属性の部分になります。

それからQの、問いの4のほうについては、新城市内で20年以上住んでいますかという問いについては、605名のうち、20年以上住んでいると言われる方は、500人。そうでない方は残りの105人という形で、市内の方が605名のうち、500人は20年以上住んでいるというような形になっております。で、済みません、こちらの表にはちょっと反映されておきませんので、お願いをいたします。

それから、市外への転出を考えている方というのを市内の方で確認をしたところ、95%の方は、考えているかという問いに「いいえ」という形で、考えていないというふうに、ここ見づらくて大変恐縮ですけど、95%の方は「考えているか」という問いに「いいえ」というふうに答えられています。市外へ転出を考えているかということで「はい」と言った方は5%というふうになります。実際の数字としては、「はい」と答えた方は32名。それから市外への転出を考えていないという方は577名というふうになります。ですので、ここで若干、577名と32名ですので、609人になるかと思うんですが、先ほど言った605名というふうに市内の方は言ってみえるので、若干問いの内容とですね、誤りが出ている可能性があるというふうに考えられます。605名ですので、4名の方は間違っって記入されている可能性があるかと思っております。

続いて、こちらの表のほうは2ページを見ていただきたいというふうに思います。問いの6、居住地として新城市がすぐれている点と思われる内容を今回は選んでくださいというふうにさせていただいております。一番多い問いがですね、多少これ、一番初めの答えというふうになっている部分もありますが、「自然が多い」という方が466。済みませ

ん、この問いはですね、二つまでという複数回答にさせていただいております。ですので単純な比較ということではありません。二つまで選んでいただいているというふうにしておりますので、お一つ選んだ方もお見えになるでしょうし、二つ選んだ方もお見えになるかとは思いますが、すぐれている点と思われる点は、「自然が多い」。で、次がですね、「災害が少ない」というふうに言われておまして、それからその次が「地域のつながりがある」というのと、それから4番目には「安心・安全な生活環境がある」という内容で95という数字が挙がっております。

それからQ7、問いの7につきましては、生活する、居住する上で不便な点、不利な点を記入いただく設問で、こちらも二つまでということをお願いをさせていただいたところ、「地域の医療環境が整っていない」という方が一番多くて347。それから次に交通機関が少ないという部分に278。それから買い物をする場所が少ないという方が246。それから、就職する場所がない、少ないという方が214というような内容になっております。

それから問いの8。生活、居住面であなたが行政、新都市に求めるものは何ですか、という問いの部分につきまして、こちらも二つまでという、ちょっとここ抜けております、大変恐縮です、二つまでというふうになりますが、こちらにつきましては、快適な生活環境の整備、充実というところが327人。それから雇用の場の確保というのが246人。それから公共交通機関の確保と、子育て環境の充実というのが207、203ということで、ほぼ同数があるというふうに考えております。

それからこちらの調査票のほう、裏面を見させていただきたいと思っております。

問い9につきましては、市外でお住まいの方で市外に20年以上という形の設問という

ふうに。ですので、市外に住んでおみえになる方で、その市外に20年以上住んでいらっしゃる、お勤めされてる方で住んでおみえになる方というふうに理解していただければというふうに思いますが、やはり237人の方がもう20年以上、外から市内へ働きにおみえになってる方で回答いただいた方。「いいえ」というところは、以前は市内に住んでいたという方が104人。以前も市外に住んでいたという方が37人というような形になっております。

ここまでがですね、問9までがこの表の内容になります。

それから、問10につきましては、市外に住んでおみえになって、勤めにいって、市外にお住まいで市内に働きにいっている方で、「市内に住みたいですか」という問いをさせていただいております。これが問10ですけれども、こちらで「はい」というふうに答えた方はですね、141名の方が市内に住みたいというふうに言われておまして、214名の方は、「いいえ」というような回答をいただいております。ですので、市外に住んでおみえになって、勤めている方で、市内に住みたいですかという問いには、「はい」と言われた方が141名。「いいえ」と言われた方が214名というような回答をいただいている内容です。

今の内容は、今単純集計という部分はですね、ちょっと皆様のところには、ちょっとお渡しできていません。というのは、ちょっと膨大な資料でして、一つずつの部分の内容というのは、ちょっとお渡しできてなかったものですから。こちらについては、きょうはグループリーダーのところには、全体のものが、加藤さんのところと、鈴木太さんのところには、事前に見ていただくような形を取らせてはいただいておりますが、そのほかの一般記述の部分もそこには、委員さんには、リーダーのかたにはお願いはしておりますけれども、

ちょっと皆様のところには、ちょっと行っていませんので、グループリーダーのところには行ってるといふことで、御理解いただきたいというふうに思います。

あと、住みたい理由とか、住みたくない理由というものは、住みたい理由というものについては、やはり自然の部分の内容が多い部分かと思えます。それからやっぱり、受動的に、今まで住んでいたからという方も、以前住んでいたからという方もおみえになりますし、それから、そのほかには、いろいろな事情があって出られたんですが、戻ってきたいという方も住みたい理由というところには入っております。それから、住みたくないとか、住めない理由というのはですね、交通機関の部分だとか、という部分の内容もありましたし、それから病院の関係の医療機関の話というものがですね、やはり年をとった後の介護の部分、それから医療の部分の不安が大きくなるからというふうな回答も、自由記載欄には書いてありました。それからあとは、税金が高いということもその中の一つとしてあるというふうに、自由記載の回答をいただいております。

それから、問12の居住と比較して、現在の居住と新城市を比較してのよい点、悪い点というものをいただいて、よい点というところでは、やはりこちらも自然の環境がよいという部分と、それから緑が多いとかっていう形の部分、それから住みなれているとか、それから人が優しい、親切でのどかで住みやすいというような内容、それから、空気がきれいでおいしいだとか、やはり自然環境の部分の内容もありますし、この部分が大半です。

それから問12の「悪い」という点の部分では、自由記載欄としては、公共交通機関の不便さ、それから道路の問題、それからJR等の便の悪さみたいなものを言われてる方と、やはり医療機関の環境という部分の内容がございました。あとは、こども園とかの内容で、

やはり短期間の仕事でないといけないとかですね、就労の関係の内容も悪いという点の中の、若干入っております。

それから13の新城市に移住するとしたら生活面での要望点というのはですね、雇用の環境、それから交通の部分の内容。それから子育ての内容も入っております。あとはですね、買い物のスーパーだとか、飲食店だというような部分も入っておりますし、それから病院の救急の医療体制みたいな、医師の充実だとかという部分も入っております。

それから問14の、子供に新城市に住んでほしいと思うかという問いもですね、自由意見欄としては、自然が多いというのが結構多くて、住んでほしいと思うのは、そういう理由が多いというふうな回答もいただいております。自由意見欄というのは、多岐にわたっておりますして、抜き書きできる部分の自由部分をちょっとできるとよかったです、なかなかそこまでできなかったもんですから、今、御説明したとおり、問いの14のとこまで、御説明をさせていただきました。

問いの15には、もっと住みよいところにするために、あなたが求めるものをということを書いていただいておりますが、ちょっとこちらのほうは、まだまとめられておりませんので、まず14までの説明というふうにさせていただきます。以上でございます。

○司会（加藤副課長） ありがとうございます。

○鈴木誠委員長 問いの14の、「新城にお子さんが将来住んでほしいと思いませんか」で、「いいえ」の、その数は言われましたか。「はい」のほうが確か273で、「いいえ」が343、若干数の合計点の問題がありますけども、一応の273と343、そういうことだったという結果でしたね。

○事務局（川合課長） はい、そうです。

○司会（加藤副課長） それでは、ただいま報告事項をさせていただきました。

続きまして、審議事項に入ります。ここからは委員長の鈴木誠先生、よろしくお願いいたします。

○鈴木誠委員長 今、単純集計の途中部分とそれから主な記述内容についての紹介をしてもらいました。

そこで、今度はグループそれぞれ、リーダーの皆さんにですね、これ以降の進行をお願いしたいと思います。

あちらの時計で、ちょうど、そうですね、7時半ぐらいを目途にして、グループでですね、意見交換を進めていただけたらと思います。

この回答を読んで、いまざっと見ていただきまして、これからもう一度よく確認をしていただいて、ここで言われている優れている点、こういうふうに書いてありますけども、もう少し具体的にどういうことなのか、いかに問題点、そして示されているとこ、この内容について、もう少し、やはり踏み込んだ課題の抽出が必要かもしれません。今後はどうしていくべきなのか、このあたりをそれぞれのグループでリーダーのもとで御意見等出し合っていただければと思います。

それではこれ以降については、鈴木さんと加藤さんにお任せいたしますので、よろしくお願いいたします。

(Aグループ討議)

○加藤直詳委員 よろしくお願ひします。個人個人の方々に聞いたという、このヒアリングシートですね、この結果をいただいております。

この結果の表面、1から9までということでおさらいですが、つまり新城市民の、実際、既に市民の方々への結果っていうのが、お手元のグラフにあらわれております。それ以降の問いの9以降ですね、10から9以降が新城市外にお住まいの方への質問ということで、

こちらの方はグラフなどにはまだ結果はまとまっていないというような状況でございます。その点だけ先に、ひとさらいさせていただいて、きょうこれからの時間が、まず、このグラフなどご覧いただいて、あと私のほうも手元にどのような、自由記入でコメントいただいているか、手元に私のほうで持っております。そのあたり見ながら、現在、今の新城に住むこと、住んで働くっていう、生活すること、っていうのはどんな状況なのか、どんな実態なのか、どんな姿が浮かび上がってくるのか、そのあたりを皆さんで、1回、洗いざらいピックアップして、それから、その次のステップとして、ではでは、その課題に対して、どんな解決策が考えられるのか、対応策、解決策、そんなところを2段に分けて皆さんで議論をいただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○中根幸雄委員 済みません、遅れまして。

○加藤直詳委員 あ、先生こんばんは。よろしくお願いいたします。

先生、まずアンケートをですね、新城市内で働いてらっしゃる方々などにお伺いしたアンケートを用意してきたので、これですね。この問いの1番から9番、つまりですね、そこに集約されてくるのが、今現在、新城市内に住んでらっしゃる方の御意見なんですが、それを大まかにまとめたのが、グラフでまとめたのが、ここの部分になります。

それ以降の新城市内にお住まいでない方の御意見というのは、ちょっとここのグラフには現れておりませんので。今からの時間ですね、ここから浮かび上がってくる、新城市内に住んでいることの実態っていうのはどんな姿なのか、それからその次に、どんな解決策、そんな問題に対してどんな解決策があるのかというようなことを、この時間で、皆さんで御議論いただきますよう。

○中根幸雄委員 ありがとうございます。進めてください。

○加藤直詳委員 はい、お願いいたします。

まず、ポジティブな点、居住地として新城がすぐれている点ということで、断トツで自然が多いというようなことをいただきました。

井上さん、よかったらこのポイントを全部一つずつ、ポストイットで起こしていただいて、貼って、まず。

と、安心、安全な生活環境、災害が少ない、うん。

○井上森林課係長 数も入れましょうか。

○加藤直詳委員 そうですね、念のため入れましょう。

○井上森林課係長 はい。

○加藤直詳委員 今、現在新城市内に住んでいる人たちの感想として、とにかく自然が多いという点、次に災害が少ない、それから地域のつながりがある、安心・安全な生活環境のような順番でいただいておりますし、自由記述の部分は、特にほかはないもんですから、それ以外の御意見というのはいらないというところなんです。

7が、不便な点。これほとんど全てですよね。地域医療が整っていない。それから交通機関が少ない。買い物する場所がない、少ない。そして、就職する場所が少ない。

次の生活居住面で行政に求めるもの。快適な生活環境の整備、充実、そして雇用の場の確保、それから公共交通機関、それから子育て環境、というようなところに落とし込まれております。

実際ですね、これ同じように問いの9以降の新城市内に住んでいない方にお尋ねしたアンケートですね。ここの部分でも、ほぼ、同じようなところにポイントが絞られてきております。

良い点は、基本的には自然が多いようなところだとか、災害が少ない。それから悪い、ネガティブなポイントとしては、ここにも載っているとおり、医療が整っていない、公共交通機関が少ない。買い物する場所であった

り、外食する場所、それから娯楽施設、こういったところが少ない。それから、就職する場所がない、働く場所がない、会社がないというようなところ。それ以外に目立つところとしては、税金が高いというような御意見ですね。それから多少あったのが、ごみの問題です。ごみを出すのがなかなか、回数が少なく不便だというような御意見などが入っております。

それからネガティブな点としては、あとほかに出てくると、お子さん、子供に住ませたいかどうかというところで学校の問題。学校がなかなかこう選択肢が少ないというようなところになってまいります、そんなところが大体出てきております。

小笠原さん、どうでしょう。この結果。大体、予想どおりという感じでしょうか。

○小笠原喜好委員 ちょっと前回、御無礼しちゃったもんで、相対的には、何て言うかな、アンケートの話を聞いておって、現代っというか、今のこの時世を反映しとって、これ私が勝手に想像していることなんですけども、東北の、例えば一つの市町村の人たちに、同じようなアンケートをとったら、どんなところに行くのかなというふうな議論がありますけども。私が個人的に思うのは、アンケートそのものは自然というものが多いいというのが一つと、それから交通が不便だという点ね、ほとんど大体100%合っているだろうと思うんですけども。

じゃあ、その選ぶ視点というものを、その人たちはどこに置いておるのかなということを見ると、やっぱり利便性というか、これをやっぱり追求しているというような気がするんですよ。

ほんで、視点の問題を各個々に聞くわけにはいかんもんですから、それはそれでいいんですけども。私なんか思うのは、そうやって飯田線の本数が少ないだとか、公共交通機関が少ないだとか、医療費申請があつて、

少ないというようなウエートの部分のよりも、住みやすいだとか、朝起きれば小鳥のさえずりで目が覚めるとか、そういったようなウエートのほうが、私は高いんですよ。なんでちょっとその辺が、そういうのはどういうふうに判断したらいいのかっていうのはわかんないけども、余りにも利便性を追求し過ぎておるのかな、私と比べるとね、何かアンケートの結果がね、そんなふうな。もうちょっと時間を、何ていうかな、ゆったりとね、キャッチコピーいろいろあるけども。そんなふうな視点で物事を捉えられるといいのかなというように、思っているわけです。

アンケートの結果としては、大体これ合ってるんじゃないの。利便性だとか、そういったようなものが、どうしても先に行っちゃってるっていうかね、そんな感じがしましたね。これは私の私見ですけども、はい。

○加藤直詳委員 そうですよ。その他としても、特に自由記述の部分で、ここにどうしても選択肢があったもんですから、どうしてもそこに皆さん集中してしまっ、そのほかの自由記述のところには、大きく、何か目立った御意見もないかなあという。

○小笠原喜好委員 済みません、仕事柄ここ災害が少ないということ、これ挙げてありますよね。

これから先、あした来るかもしれないけど、あさって来るかもしれないけども、それわかんないけども、過去において、これだけの年数、災害だとか、台風も来るぞ、来るぞって言ってほとんどきてないし、大雨も降ってない市っていう地方っていうのは少ないと思うんですよ。まあ、それはたまたま運がいいのか、地形というもの、そのものがいいのかというのは、確認というかね、そういうものはなかなかつくりにくいと思うんですけども。

だけど、過去においてこれだけ、私たちが記憶にあるのは昭和47年の七夕豪雨以来はそれらしきものというのは来てないというこ

とですが。

○加藤直詳委員 実際、災害は少ないんですか。

○小笠原喜好委員 少ないです。仕事の的に見てもですね。ということであります。

○加藤直詳委員 今、小笠原さんから、かえって現実も、実際こうなんでしょうけれども、どちらかという意見も、どうしてもこう利便性を重視し過ぎ、そこに重きをちょっと置き過ぎているのではないのかなという疑問、おっしゃっていただきました。

どうでしょう、かえって、荻野さん、今泉さん。

今泉さんは、もうずっと豊川にお住まいで、新城にお仕事で来られているというところで。

○今泉英明委員 はい、そうです。

○加藤直詳委員 荻野さんは、今お住まいはどちらか。

○荻野達己委員 今は豊橋、はい。

○小笠原喜好委員 あ、豊橋にお住まいで、しかも転勤でこっち、豊橋、こちら新城に来られてお住まいは豊橋で、お仕事は新城というところで。何か、お二人、気づかれた点などあれば、おっしゃっていただければなあと思います。かえって遠くの方々の視点で見られたときに。

○今泉英明委員 ちょっとよくわかりませんが、こういうのって、言語データを解析するような手法があって、指摘がもっともとできると思うんですけど。多分、これ軸が2つあって、1つの軸は、ビジネスチックの話ですわ。もう一つの軸が、そのアン・ビジネスっていうか。

○加藤直詳委員 生活とか。

○今泉英明委員 自然が多いとか。ちょっと言葉が見つかりませんが、まあまあ、そんな感じを受けました。で、ちょっと就職するところも少ないんですかね。そんなこともないような気もするんですけども。十分ありますよね。ここ。

○加藤直詳委員 はい、ありがとうございます。ね、荻野さん、ええ、かえて俯瞰的な展開で。

○荻野達己委員 ええ、まさに外から見て、このとおり。こういうふうにしかまとまらない。そのままだと思うんですけど。

でも、何でしょうね、変えられないことって、じゃあ、その今ここでいろいろ考えたことで変えられないことって多いじゃないですか、公共交通機関の飯田線の本数増やせて言ったって、そこはもう商業の条件の話なんです。そのJRに陳情したところでJRも採算考えてやってるわけで、無理なことは無理なんです。

やっぱりその小笠原さんがおっしゃったように、自然が多い、やっぱりある程度不便、やっぱりやむを得ないですよ、環境なんです。そんな中で、まあどうしていくかっていう議論をしていかなきゃいけないんじゃないかなと思って。

○加藤直詳委員 利便性を追求して、それを向上させるっていうようなところに労力を注ぐよりも。

○荻野達己委員 そうです、そうです。そこは与えられた、変えられない条件の中で、新城がどうしていくかっていうことしかないわけで、その行政にいろいろ求められることも多いとは思いますが。そうはいかない、コストの問題もあるし。行政のコストの問題もあるわけですし。何かやればお金かかってくるわけで、税金の問題にかかってくるでしょうし、そこなかなか難しい。

で、おっしゃったように雇用の場がないっていうのも、逆に、事業所の方のお話し聞くとですね、人がいないっていうことも返ってきて、そのアンマッチは一体どうなっているのかな。

○加藤直詳委員 そうなんです。

○荻野達己委員 不思議なことで、はい。ないから逆に、豊川、豊橋に出ていくような

ね、お客さんもいらっしゃるわけで、そこもうちょっと、働き口がない、ない、ないって言うてる人の話をよく分析しないといけないんじゃないかなと思いますね。

○加藤直詳委員 はい、そうですね、ありがとうございます。

鈴木さん、どうぞ。

○鈴木延良委員 私はね、今この自然が多いっていうことと、災害が少ないというのは関係してるっていうのか。私らは鳳来地区に住んでると、今までは災害なかったんですけど、ね、100年とか200年の単位での大災害がぽっと来たときには、孤立するところはいっぱいあるし、がけ崩れがいっぱい出そうだっていう、非常に危険な部分が反面あるわけなんですよね。そういう部分で、そういう災害にも備えるような何かね、対策っちゅうのか、対応が必要なのかなということと、もう一つは、今働くところがないっていうのね、これは今すぐ企業を誘致するとかいうのは、非常に問題だと思うもんですから。それよりも少しはいいのかな、ちょっとやっぱり利便性っていうんですかね、通勤が豊橋、豊川に通勤圏として、新城、鳳来から、こう通勤ができるような、やっぱり対策ですよ。そういうのを対策して、当面はもう、豊川市、豊橋市で勤めて、家は新城とか、新城市内ね、住めるような、そういうようなまちづくりっちゅうのか、地域づくりが必要じゃないのかなって。長期的な部分とね、今やっぱり進める部分って考えたときには、そんなふうに思いますけどね。

○加藤直詳委員 市内の生活、市内で働くことだけではなくて、豊橋と豊川へのベッドタウンという部分でしょうかね。

○鈴木延良委員 そういう部分でね。そういうことも合わせて考えてく、当面はね。将来、こうまたね、大きな企業が誘致できれば、また違ってくるんですけど、それもやっぱりね、そうそう期待ができるもんじゃないとこ

ありますからね。

○加藤直詳委員 そうですね、はい。

○鈴木延良委員 あとはやっぱり、その自然が多いところをうんと生かすということだったら、やっぱり観光だとかね、そういうものでこう人が携われるような、そういうものがやっぱり考えられるなどと思いますよね。

○加藤直詳委員 はい、ありがとうございます。

中根さんいかがでしょうか、この実際に、この結果、予想どおりというふうに。

○中根幸雄委員 そうですね。質問がね、生活居住に不便、不利な点を挙げてくださって言うてるもんですから、例えば、その今困っていることを挙げてくださということでもないし、まあまあ、どこが不便でどこが不利なのかなということ丸をつけられたと思うんですがね。

新城市も広いもんですから、医療環境について言えば、このあたりに住んでいけば、そんな無茶苦茶、医療環境が悪いわけではないような気がしますね。今、お産ができないということが、今象徴的に言われますけれども、それはもちろんできたほうがいいに決まってるんですけども。日本中にあるんですね、そういうところが。本当にものすごくたくさんあります。それから心筋梗塞なんてハートセンターまで1時間以内で行けますので、そんなに無茶苦茶、不便ではない。実際、夜間診療所をやってますとね、患者さんが1人も来ない日も結構あります。数人ということが、まあ、インフルエンザがはやったりすると、10人とか20人来ますけど。

○加藤直詳委員 そんなにですか。

○中根幸雄委員 ええ、それ以外だと数人ですから、非常に軽い方が多いし。まあ、そんなに、この辺であればね、そんなには劣っていないと思うんですが。

○加藤直詳委員 このあたり、この辺というのは、この新城の。

○中根幸雄委員 この新城地区といいますかね。

○加藤直詳委員 市街地地区で。

○中根幸雄委員 だから、作手とか鳳来のほう、奥のほうになればですね、当然大変な、さらに30分とか40分かかかるわけですから。ですが、そこまで行けばですね、それもまた日本中であってですね、そういう山の中に近いようなところで自然に囲まれて暮らしてみえて、で、医療環境は都市とまではいなくても、都市近郊と同じぐらい、というのはそれは無理な話ですからね。その辺、どの辺で妥協するかということだと思っんですね。

話がまとまらないんですけども、ありそうな意見で、そうですね、だから交通を便利にしろとか、店を増やせとか言ったって、それこそできるものでもないの、観光という話もありましたけれども、僕は今ここでそう言って、例えば農地なんかもしあればね、都会の方に野菜つくってもらったりね、通ってもらってね、時々ね、そういうことでもできて盛り上がればね、ブームになればうまくいくんじゃないかと思っんですけどね。

そのぐらいしか思いつかないです。

○加藤直詳委員 はい、ありがとうございます。

私も個人的には実際ね、どこの地方都市とか、まあ地方であっても、これは結果言い出せばきりのない話で、どこでも当てはまるものなのかなというふうに思っております。

不便だ、不便だって言っても、まあ、どこにいてもみんなそうだろうというふうに、実際、私も個人的にちょっと受け止めております。

ちょっといったんここで、小休止して、ちょっと鈴木先生と打ち合わせをさせていただきます。

済みません、ちょっと中座を。

○小笠原喜好委員 産業部なんかというと、さっき言った、今泉さんが。働く場所がない

っていうところが、もうちょっと細かくさ、実際、ちょっと分析してみないと。企業のほうの側じゃ、求人を出しても応募がないっていう、ね、そこんところがこういうふうになっておる。

○川合課長 ミスマッチになっている。

○小笠原喜好委員 本当に調べるには、このところある程度。

○川合課長 だもんでそういう雇用対策みたいなものがなければ、ミスマッチが。一方は出してますよ、一方はないですよと云ってるんで、そこをどう見つけるかというのも、産業の中で考えるのも一つの。あるものは、あるっていうふうに出すかですね。企業の人たちは会社までつくって雇用をやっているはずなのに、ここに来ないっていうのは何でだろうっていう話。

○小笠原喜好委員 それ感覚で言っているのかな。

○川合課長 自分たちが就職したいという内容なのか。

○今泉英明委員 どういう人がないって答えたかわかりませんが、日本全体を見ればですね、物づくりに携る仕事を求める人っていうのは減ってるんですよ、汚いとか危険だとかきついと。何かスマートじゃない、低評価したりするだけで。何となく、バーチャルで仕事をするようなそういうところに学生の人気が集まって、まあ確かにあるということで、そういうことが新城市にもあるのかもしれないですけども。中身が分からないですね。

○川合課長 職種理解とか、そういうところにやっぱり。無論、オーエスジーさんとかは、就職説明会や企業説明会に出てもらってますが、そういう部分もある。

○今泉英明委員 多分、新城市に在住の人っていうのは、従業員で半分以内かな。さっき言われたように55%ぐらいの従業員は豊橋や豊川から。

○加藤直詳委員 済みません。よろしけれ

ば、あちらのポストイットなどをご覧いただけると、井上さんが取りまとめていただきましたが、右端、視点①というところですね。そこがどちらかというところとネガティブなところですね。どちらかというところと利便性を追求して、生活の利便性を考えていけば、どうしてもこうなってしまう、こういった視点になるだろうというふうにもとらえますが。地域医療が整っていない。それから、交通機関、公共交通機関などが少ない。それから、その後に来た、買い物する場所が少ない。それからほかで学校が少ない、外食できる場所がない、税金が高いなどなど、細かなところがいろいろ出てきております。

そして視点②というところで、ネガティブな視点ですね。このアンケートの中にも、ごめんなさい、これはポジティブな視点ですね。この中にあった、新城は自然が多くていいところだと。災害が少ないからいいところだと。そして地域の中のつながりがあっていいところだと。そして安心、安全な生活環境がある場所だというようなところですね。そしてちょっと追加で、鈴木さんがおっしゃってくださったように、豊川、豊橋へのベッドタウンとして進化していても、発展してもいいんじゃないのかというような視点。

それから荻野さんからおっしゃっていただいた、一つ、一方で就職する場所がない、働く場所がないっていう議論と、もう一方のよくある声としては、働いてくれる人、働く人が少ない、いないというこのミスマッチですね。この二つ、よくよくこの地域内では出てきますが、そんなところ。

ここからですね、恐らく全部は、少しでもですね、良いことはより伸ばす、悪い、ネガティブなことは、より、どうすれば改善できるのか、どこかそのあたりにポイントを絞ってですね、全部1個、1個できることならばやりたいのですが、そこまで恐らく時間的に余裕は到底ございません。何か、どれか選ん

で、一つずつ、少し皆さんで議論できればな
と思っております。

できれば、議論を集約する上で、どれかま
ず一つから、手始めしたいと思うのですが。
いかがでしょう、どなたか。これやりたいっ
ていう、何かここ、問題提起。自然が多いと
いう地域特性を何かより伸ばすようなこと。
もしくは、公共交通機関が少ない飯田線の本
数が少ないだとか、車の渋滞、車がないと生
活できない、そんなところをより改善でき
るような、この何か新城らしいような改善策と
か、そんなことがあると、そんな議論ができ
ると一番いいなあというふうに思いますが。

かえって小笠原さんが、何かこう、この地
域のポジティブ、いい点、自然が多い、災害
が少ない、地域のつながりがある、安心安全
な生活環境とか、そんなところで、そんない
いところを伸ばすような、何か御提案など、
アイデアなどないでしょうか。

○小笠原喜好委員 さっき鈴木さんが言っ
た、地域性を生かしたベッドタウン化ってい
うものは、例えば、今、通勤するにしてみ
ても、買い物行くにしてみても、何にしてみ
ても、なかなか距離単位じゃなしに、時間単
位に全部なってると思うんですよ、はかるも
の全てが。その時間単位を、何て言うかな、ま
さしく今度のリニアなんかその最たるものだ
けども、まあ、あれだけのものが必要かどう
かっちゃうのは別問題だろうけども、まず、
ある程度、生活する環境の中で、あるいは仕
事をする環境の中で、そういった時間単位を
短縮するというかね。3分、5分短縮する
というのは、私、すごいことだと思うんですよ。
それは、見とってね。とにかく車でいう時
速60キロだったら、ね、わずか5分の違
いでめちゃめちゃ距離が違うわけ。そうい
うことを例えば、今度豊田のほうからも、あ
るいは浜松のほうからも、あるいは豊橋の
ほうからもってというような、そういうところ
を対象にした、必ず、ああいう都市というの
は、田舎

に住んでみたいだとか、田舎っていうかね、
ただ今何かの制約で来れないっていう人
って、必ずおると思うんです。まず、そう
いう人たちを、さっきの去年調べた空き家
対策の関係から、住宅番号でも何でもいい
や、そういったものを市長はやるって言っ
とったよな。そういうものとくっつけて農
地つきでやるだとか、さっき中根先生が
言われたようにさ。というふうにその辺
を工夫していけば、結構来るんじゃないの
かなっていう気がするんだけど。私の考
えが甘いかもしれんけど。
○片桐商工・立地課長 結果的には、持
っているものを生かしてく方向で進めて
いくっていう、あるものを。立地の問題
もあるし観光もいいものもある。あるも
のをうまく生かしてく方向で。電車を増
やせと言っても乗らんもんで。それで
もいいという、どうしてもいいほうが見
えちゃうけど。

○小笠原喜好委員 それで一つ思ったの
は十何年前だけど、私たちがやってる
NPO法人で、例えば山の下刈りだとか
植樹だとか、そういったことに対して、
例えば名古屋だとか岡崎だとか豊橋
のほうの人たちの中にお金を払って
でも下刈りをしてほしいだとか、植樹
をしてほしいだとか。我々田舎に住ん
どってそんなお金まで払ってね、そん
なことしたくないわってこう思うん
だけども、まちの人だとして、自然と
触れ合うことに対して、お金を
出してでもやってもいいという人
っていうのは、全部じゃないけど必
ずおると思うんですよ。

そういうのを、今言ったような形で。
僕はそのとき初めてそう思ったん
ですよ。この人たち、お金を払って
でもやらせてもらいたいって思
う人がおるんだなっていう。田舎
の人の感覚じゃ、ちょっとできん
と思うんですよ。その辺で、何
かね。

○加藤直詳委員 住んでくれる人たち。

○小笠原喜好委員 つながっていけるかな。

○加藤直詳委員 そうですね。

○小笠原喜好委員 ほかの人たちも。

○荻野達己委員 うちの会社のあれですよ。白神山地の植樹、ボランティアで実費で募集したら結構すぐ埋まるんですよ。

○加藤直詳委員 旅費などはもう実費で。

○荻野達己委員 そうです。とかね、さっき中根さんおっしゃったけど、横浜に住んでアクアラインを通過して千葉に自分の農園を持ってるとい人もいました。わざわざ週末そこに行って。だから都会の人たちのニーズって、結構、都会というほどの都会でもなかったですけど、そういうニーズがあるといえはるんですよ。そういうのをうまく取り込むというのは。ここはまさに新東名ができると、ものすごい可能性はあると。それをいかにこう、何つうのかな、こう大々的にやるというか、個々でやるんじゃないで。まさに市としての取り組みとしてできるかですね。私有地ですからね、いずれにしたって。

○加藤直詳委員 もしくは、つまりはレンタル農園ってことですよ。

○荻野達己委員 そうです。それで十分です。

○加藤直詳委員 レンタル農園するとき、どんな、何が必要なのか、それを出していったときに、まあ、そうですよね、個人の方がやられて農協が間に入るのがいいのか、市がね、農業課とかが入ったほうがいいのかっていうようなところに落としていければ、そこにもなってつながりますよね。

○荻野達己委員 もう一つ、その利便性とかって意味じゃなく、この条例の域ではないかもしれませんが、やっぱりもっと市街地に人をこう集めて、いわゆるスモールタウンというかね、そういうことも中長期的にはやっていかなきゃいかなのかな。市街地の空き家を、やっぱり劇的に減らして、なかなかこう行政サービスがね、広い新城の隅々まで行き渡らせるというのは、維持していくのが大変だと思うんで。住域をこう狭めていくとい

うか。

○加藤直詳委員 山奥の一軒家みたいなどころではなくて。

○荻野達己委員 そうですね。ということが必要なのかな。それで行政コストを大幅に削減する。そうすると、そういう意味で浮いたコストで交通機関のことの解決にもなるかもしれないし。とはいえ、自然を生かすのであれば、ちょっとまたそれは、一致しないようなことですけど、利便性の観点から言うと、すごい大変なことだと思うんですけどね。すぐにはできた話じゃないですが、そういうことも必要なのではないか。

○加藤直詳委員 ある意味、合理的ですよ。

本当に僻地にお住まいになってらっしゃると、そこへの水道のサービスから電気、中部電力会社になっちゃうから、電力からね。ものすごくそれがコストが恐らくかかってますでしょうからね。コンパクトに集約ね。

○荻野達己委員 そうです、コンパクトシティです。

○加藤直詳委員 そうですね。

まずでは、今は、どちらかというとも新城は自然が多くていいところだよっていう、ポジティブな意見に対して、それを楽しんでもらう、都市部の人たちに楽しんでもらうしかけとして、レンタル農園とか、小笠原さん取り組んでらっしゃる森林体験というようなことも出てまいりました。どちらかというとも、そうすると新城に住んでいただくというよりも、新城へ遊びに来てもらうというところでしょうかね、今のでいくと。どちらかというとも観光に近いというね。観光的な要素で。なかなかやはり住んでいただくのはね、ハードルが高いでしょうか。そういった観光から、まずレンタル農園とか森林体験がきっかけとなって、やはりそこからということなんじゃないかな。

○荻野達己委員 よくね、税金が高いって

いう話をお聞きするんですけど、本当に高いんですかね、この際。固定資産税が。

○加藤直詳委員 僕もよくわからない。実際どうなんですか、新城市っていうのは。

○小笠原喜好委員 住民税が高い。

○加藤直詳委員 市県民税が高いっていうふうに具体的に書かれてるとこもありますし。果たして。一緒ですよ。固定資産税。

○老平部長 ちょっと税金のことが出たんでお話をさせていただきますが、固定資産税も市県民税も標準税率っていうのを使って全国ほとんど税率は一緒です。ですので、税率でその新城が高いとかですね、豊橋が安いとかっていうことはございません。

主に税金が高いと言われる原因は、固定資産税が高いというふうに、一般的には住民の方の認識は、そういった認識が多いです。で、固定資産税そのものはですね、評価額に対して1.4%という定率がかけられます。その評価額そのものはですね、3年ごとに評価替えをしますけれども、取引事例を元にして評価額が決まってくるという形になってます。そうするとですね、新城の場合はですね、土地の取引事例が非常に少ないんですね。一応、皆さん土地を持つって手放さないという状態になってます。そうすると、手放さない状態ですと、土地の取引事例がですね高止まりする傾向が強いわけです。流動性が高ければ地価は下がってくるんですけども、流動性が低いとですね、地価は取引事例の売買価格が上がってきます。そうすると、評価額自体も上がっていきます。そのために課税の基になる評価額が高目に設定される可能性があるということです。ですので、土地の取引事例が少ないこと、それからまた、比較的高めの値段で取引されてるといのがその原因になっています。

○鈴木延良委員 主に宅地のほうですよ。

○老平部長 主に宅地ですね。

○加藤直詳委員 だから実際は、本当、恐

らく豊川、豊橋と変わらないか、高いくらいになりますでしょうか。

○老平部長 そうですね。路線評価のものが出てきますけれども、3年ごとに路線評価出てきますけれども、結構な位置にね。

○片桐商工・立地課長 面積の大きさもあるかも知れん、持っとる。

○小笠原喜好委員 雑種地やなんかもそうか。

○片桐商工・立地課長 全部評価の方法は一緒だもんで。ただ、昔は評価額安かったけど、平成6年ぐらいから、国が一律にこういう評価でだんだん差がない、縮めてけっという方向になって、ずんずん、ずんずん上がってきちゃうんで、高いっていう感じがするかもしれん。だんだん高止まりしてきた。

○小笠原喜好委員 そうですね、上がってくると、高い言うわな。

○片桐商工・立地課長 もともとが、それぞれの自治体で好き勝手な状態だったもんで差がすごいあったんですけど、それが今もう全国同じように上げてけっということで徐々に、徐々に上げとるもんで、上がってますよね。

○加藤直詳委員 新城だけがっていうところですね、それはないと、ね。

○加藤直詳委員 きょう、せっかく中根先生がお越しいただいているので、ちょっと地域医療についてピックアップできればなと思うのですが。

一番こう新城市内の医療のことで不便だっって言われることとして多く挙げられるのは、例えば先生、どんなことが一番目立ちますでしょうか。まあ産科がないとか。

○中根幸雄委員 まあだから、一つの象徴的なことですよ、地元で赤ちゃんが産めないという評価がされる。まあ、それが一つ。あとは。

○小笠原喜好委員 私どもそれ以外は、そんなにあんまり感じんけどな。ちょっと、1

5分走ればいっちゃうもん。

○加藤直詳委員 市民病院が充実していないとか、そういったことが出てくるんですが、皆さん、大体耳にすることで。

○鈴木延良委員 その医療っていうのは、この辺のとこだけですよ。市民病院で十分対応しきれない部分があるのでっていう考え方のほうが大きいですよ。

○今泉英明委員 前に言ったんですけど、事故があった、2針3針縫う程度なんです。それも、新城市民病院受け入れてくれない。

○中根幸雄委員 今は、受け入れてるでしょうね。時間によるでしょうけど。

○今泉英明委員 昼間でもです。

○中根幸雄委員 いつごろです。

○今泉英明委員 いや、つい最近もそうですよ。

○中根幸雄委員 ああ、そうなんですか。

○今泉英明委員 その新城市の。

○加藤直詳委員 それ救急車。救急搬送ではなくて。

○今泉英明委員 いやいや、救急車までいきませんが、自前の車で運んできますけど、電話した時点で断られるので。

○中根幸雄委員 それ指ですか。

○今泉英明委員 それから夜は絶対そうですね。

○中根幸雄委員 切り傷が小さくても、指です。特に人さし指とか、この指が将来動かなくなる可能性があるような切り方をされてると、大きいところへ行けという可能性があります。眼科は。

○今泉英明委員 これは今月の話です。

○中根幸雄委員 眼科は問い合わせたんですか。眼科が2件ありますけども。

○今泉英明委員 あ、それで眼科行きました、眼科へ。最初、新城市民病院へ。

○中根幸雄委員 市民病院は眼科がないんですね。眼科医が非常勤でして。

いつときは本当に医者が不足してまして。

で、はっきり言いますと、見てない患者には訴えられないっていうことですね。それはそういうふうになっちゃうんですね、方針と言いますかね。だからもう、私だけは避けたいみたいな雰囲気は確かにあったんですが、最近はですね、総合診療科のドクターは僻地の診療所などへ行くためのトレーニングのために来ておりますので、ちょっとしたけがもやると思うんですけどもね。

ただ、やっぱ個人の資質の問題がありますので、そのときの当番のドクターが受けるか受けないかっていうことに影響されて、施設としてこうだっていうことがなかなか打ち出せない、その小さい病院ではですね。大きな病院であれば、もちろんこの施設は、これとこれはこうやって決められるんですが、個人の問題になるので。

○今泉英明委員 最近は外科も昼間は。

○中根幸雄委員 いや、あんまりはやってないんだけど、そういうちっちゃいことでしたら受けるんじゃないかと、僕は思うんですけどね。

ただ、指の場合ですと、先ほど言いました、指の外科って特殊でしてね、顕微鏡手術になることがよくあり、指を助けるためにはですね。切っちゃうだけなら外科の医者なら誰でもやりますけども。そういうことが何かあるのかもしれない。

○加藤直詳委員 ちなみに、僕、先週、うちのお客様で転倒して頭を切られた方、出血されて、それは救急車を呼ばせていただいて、市民ですぐ、ええ、新城市民で。恐らく救急車のほうが、どうなんですか。

○中根幸雄委員 そうかもしれない。可能性はありますね。それはですね、院内です。救急車は誰、それ以外に来た人は誰と、恐らくそういう役割を、分担を決めてますので。救急車の分担をするドクターは、最低限の技量を持つてる人が交代でやって、それ以外の場合にはいろんな人がいる可能性があり

ます。

○小笠原喜好委員 つまり救急車で行かないと。救急車、呼ぶったらね。

○中根幸雄委員 そうですよ。

○加藤直祥委員 それは車で行かれて、窓口でという。

○今泉英明委員 いやいや、もう先に電話しました。

○加藤直祥委員 電話をして、電話で問い合わせられて。

○中根幸雄委員 開業医でもですね、整形外科をやっているとところが2件ありますし、顔の首から上のけがでしたら、脳外科やった先生がおりますし、その辺の情報提供ももうちょっとしなくちゃいけないのかもしれないですけど、ちっちゃなものであれば開業医でも対応してると思うんですけども。

○加藤直祥委員 診療時間外となると、まあ、先生次第ですよ。

○中根幸雄委員 普通はなかなかできなくて、それが今市民病院が何時かわかんないけど9時ごろ、何かちょっと8時半とか9時ごろまでは診てくれることが多いです。で、その後、夜間診療所が8時から11時までやっていますので、そこで治療が完結しない場合がありますけども、要するに、重傷かどうか診てですね、軽傷であればそこで薬を出し、重傷だったら豊橋行ってください、豊川行ってくださいってことになるんですが、そのゲートの役割は果たしてると思われましてね。

○今泉英明委員 そうそう、うちも頻繁にあることじゃないですが。私が3年間赴任してる間に4回ありまして、4回お断りが。

○中根幸雄委員 ああ、そうなんですか。

○加藤直祥委員 それ工場内での事故で、作業中の。

○今泉英明委員 工場内。

○加藤直祥委員 どうしてもなかなか新城市民は受け入れてくれないっていう、何か風潮が。

○今泉英明委員 そういうイメージが。最近、だからそういうことも、最初からもう、そういうことになっちゃう、豊川市民病院へ。

○中根幸雄委員 そうですね。

○今泉英明委員 最初からそうになっちゃう。

○中根幸雄委員 そういう、だから先ほども言いましたけども、どうしてもそのときのドクターの考え方とか技量によりますので、そういうことが起こり得ることじゃないかなと思いますけどね。

○加藤直祥委員 ひょっとすると、どこかでこれもミスマッチみたいなものもあるんですかね。

○小笠原喜好委員 あるかもしれんね。

○中根幸雄委員 ただね、電話だとやっぱわからないので。そうですね、あともう一つは直接行けば、誰かが対応はしますよね、ドクターがね。

○加藤直祥委員 ああ、窓口に行けばですね。

○中根幸雄委員 やれるかどうかは、まあ別にしてですね、対応はするとは思われますが。

○小笠原喜好委員 まず、そういうところっていうのは、今の医療の話だけじゃなしに、アンケート全体を通して、片っ方はプロなんだ。で、アンケートに答えてるほうはアマチュアなんだ、言ってみると。ね、そういうとこれっていうのもあると思うんですけど。

○加藤直祥委員 うん、そうですね。

○小笠原喜好委員 仕事のことに関することはいいんだけど、それ以外のことっていうのは、今言ったアマチュアだもん、私なんかも。

○加藤直祥委員 特に新城市内に住んでいらっしゃる方でないと、余計にこうイメージ先行の部分とか、人から聞いたことが先行してしまうでしょうから。

産科っていうのはなかなか、やはり持つてくることは難しいんでしょうか。

○中根幸雄委員 きっと難しいんでしょうね。

だからハードワークですよ、産科は。

○加藤直詳委員 そうですよ、産科は。

○中根幸雄委員 だから公立病院の給料では、もうとてもその仕事の激しさに比べて、割が合わないっていう考えられる方もおるのかもしれない。というのは私立というかですね、名古屋大学系の産婦人科の先生がグループつかったその産婦人科のグループが、結構愛知県中に新しく施設を作ってますし、シンガポールかどっかにも作ったって新聞に載ってましたけど。だから人は、そこに産科医は当然居るわけですから、いろんなやり方があるんでしょけど。

新城に産婦人科を持ってくるというのはどうなんですかね、よくわかんないんですけど。努力はしてみえると思いますけど。何かどうなっているかわかりませんが、そのうち来るかもしれませんね。

○加藤直詳委員 そうですよ。

僕のところで、個人的な話ですが、まだ数カ月前に子供が生まれたんですけど、うちは家内は、はなっから都内だということで、こっちは全くなかったもんですから。どうなんでしょう、例えば何かお近くの方でお産の問題とかそんなことって何かございましたでしょうか。小笠原さんのところは。

○小笠原喜好委員 今度娘がね、地元に住んでおるんだけど、それは二人とも、もうあれ今何歳だ、今度3歳と、丸1歳。それは聖隷だったね。

○加藤直詳委員 この中でもやっぱりこう、ね、なかなかお産で遠くの病院までいくのが不便だっていう話が、大体皆さんの御意見なのかなとも思うんですが。聖隷行かれる、通院する分には全然、特には。

○小笠原喜好委員 うん、全然大丈夫。そんなに時間かからん、40分ぐらいで。そんなに問題ない。

○加藤直詳委員 鳳来からだとも40分ぐらいで行けるでしょうが、かえってこの新城、街中となると、豊川だったら40分ぐらいですかね。

○小笠原喜好委員 そうですね。

○加藤直詳委員 30分くらいか。

○小笠原喜好委員 豊川までいくから。

○加藤直詳委員 で、聖隷になると、ちょっと1時間近くかかっちゃうんですかね。

○小笠原喜好委員 新城からだよね。

○中根幸雄委員 一応、鳳来に助産婦さんが、市の施設がありますよね。だから順調な方でそんなに迫ってない方は、そこでちょっと診てもらって安心するとかいうこともあるようですよ。

○小笠原喜好委員 途中の検診は、そこへ行って診てもらったら、たしか。

○加藤直詳委員 ああ、そういうことですね。

井上さんの周りとかどうなんでしょう。女性で。産科とか不便だとか、具体的にどんなことなんだろうなあって。具体的な不便さ。

○井上森林課係長 あんまり私自身は耳にしないですね。

○加藤直詳委員 皆さん、どちらかというとなんかそれが当然のことだという感じで、聖隷に行かれたり。

○井上森林課係長 やはり問題なく生まれてる方がもしかしたら多くて、豊橋とかに最初から行って。何となく、あんまりこうセンシティブというか、過剰反応とかじゃなくて淡々と。今、お医者さん、私に向いたところ、ここにはないから。たとえば産科があった時でも、豊橋がいいんだったら豊橋に出たんですけども。

○加藤直詳委員 そうですね。

○井上森林課係長 なんかそのノリで、たまたま私の周りでは何か、ずっと続いているかな。こう何かを一つを「わーっ」と思ってしまうのか、淡々といくのかでいろいろなもの

に変わってくると思うので。その辺をこう、何かをもう一つ制度をつくろうと考えていく側として、やっぱり淡々路線に行ったほうが、いろんなものがやりやすい所がある。

○加藤直詳委員 意外に産科の問題っていうのも、何か、巷で言うほどの問題でもないのかっていうことなんじゃないかな。

○井上森林課係長 いやあ、それは私の印象だけなんでわからないですけども、何か子供さんの問題っていうと、みんなが「ああ、大変だ」ってなりやすいんですが。

○中根幸雄委員 この人口で、産科的に十分なことっていうのは絶対無理ですからね。というのは、産科医一人連れてくりゃあいっちゃんもんじゃないでしょう。手術するときに、一人じゃできない手術のほうが多いですから、と、二人は必要だと。夜中も診ましよういうと、じゃあ3人は必要だとか、4人は必要だっていうと。で、たまには休みも取りたい、学会にも行きたいわっていうと5人いるかっていうと、絶対無理ですから。逆にですね、日ごろの検診とかそういうのを充実させて、豊橋なら豊橋に。しっかりとした産婦人科医が十何人おって、小児科医も何人もいるようなとこ、そういう施設を充実させて、必要だったらそこへ行くっていうふうにしなないと無理でしょうね、現実問題として。

○加藤直詳委員 そうですよ。

○中根幸雄委員 そう思いますけど。

○加藤直詳委員 そうなったときには、かえってこの地域の人であれば、車でずっと走って行ってしまふからいいのか。電車で行けばいいんじゃないかな。

○中根幸雄委員 まあ、車とかね。それこそ、切迫してれば救急車とかね。そういうことじゃないでしょうか。

○加藤直詳委員 かえって、より住民の方々にも、ここではもう産科医が置けないのは当然のことなんだっていう、何か認識を持っていただいたほうがいいんじゃないかな。

○中根幸雄委員 そう、そう。

○加藤直詳委員 ええ、無理っていうね、うん。もちろん。今現実としては、現状としては、産科医を置くことはもう無理なんだっていうことを、やっぱりしっかり示すことのほうが重要なんじゃないかな。

○鈴木延良委員 希望と、あったらいいなっていう部分と、そういうところが理解できていくだけの、ちょっとこう急にPRしてもなかなか難しいかもしれませんが、だんだんとそれになれていくっちゃうのか、そういうもんだっちゃうのが分かっていくような。

○中根幸雄委員 だから、安心して産めないというのは、何かあったときに豊橋まで救急車に乗っていても、豊橋の医者も不足してて、診てくれるかどうかわからないとか、そういうであったら、本当に安心して産めないっていうことになりますから、どちらかというところをしっかりとすれば、あとはうまくこう健康管理していくっていうことじゃないんじゃないかな。

○小笠原喜好委員 あそこへ行けば必ずお産ができるっていうふうになつたりゃあ、さほどそんなに苦には。まあ男だもんで女の人の気持ちはわからんけどさ、思うかもしれないね。

どっかに、その今言った、何でもそうだけでも、どっかに行けばあれがあるとか、これが、こういうことができるだかっていうのが1個あると、やっぱり人間っていうのは安心感とかっていうものが発生すると思う。何にもないところもあるのね。

○鈴木延良委員 そうでしょうね、その不安をね、上手に安心に変えなければね。

○加藤直詳委員 でも、先ほどの今泉さんの、工場内での怪我などは、何か、それこそ何か新城市内、地元で近くで、ぱっと何かしたいですよ。

○今泉英明委員 まあ、そうですね。本人もね、近場がね。

○中根幸雄委員 産業医の方がいますよね。

○今泉英明委員 はい、常駐はしてないですけどね。

○中根幸雄委員 市民病院と一度ですね、相談といたしますかね、こういう環境で、こういうふうなんだけど、まずは連れてくるから受けてくれないかとかいうお話を市民病院とされると安心できるかもしれないですよ。

○今泉英明委員 つながり厚生会病院があつて。

○中根幸雄委員 ああ、どこかでね、そういう。

○今泉英明委員 新城市内に、求められないという、さっき豊橋、豊川に行って診てくれるということ、おっしゃるとおり。

○中根幸雄委員 あと、もう一ついいですかね。気がついたことがあるんですが。

○加藤直詳委員 はい。

○中根幸雄委員 最近、老人がですね、まあ、もう高齢になって、積極的な治療が必要ないと。例えば骨折、大腿骨骨折して2カ月ぐらい入院してリハビリもやるだけやって、でもう病院ではやれることがないっちゃうか、やることがないっちゃうかね。で、あとは自宅でリハビリしましょうみたいな、要するに、病院は長い間置いとくと赤字になるような、今、システムがありますので、診療報酬のそういうシステムがありますから、病院から出すと、そういう人が行くところがないと。これはもう日本中で起こってることで、新城だけではないんですがね。

あるいは、もうただ、ただっていうんだけど、本当の老衰みたいに体が弱ってきた人が、とりあえず家族が心配だで、入院させてくれて、昔はそういう人入院させたこともあるんですが、それはもう病気じゃないので、往診する医者を探して自宅で見えてくれとかですね、そういう事例はたくさん出てきてると思いますよ。そういう方々がもしかしたら、地域医療関係が整っていないと思われたかもし

れないですね。昔はゆっくり入院させてくれたのに、今はすぐ出されて、家族に見ろ、見ろって言われて、家族は車で連れてくのも大変だみたいなね。そういった可能性はあるんじゃないかなと思います。

○鈴木延良委員 それは今、僻地、何て言うんですかね、介護っていうんですか、そういうのとか、訪問介護とか看護ですよ。そういうのが鳳来の支所には、保健所にありますよね。

○中根幸雄委員 ああ、ありますね、看護師センター。

○鈴木延良委員 それを積極的に何か出てるんで、まだPRができてないのかわちゅって、いろんなところに看護師さんたちが出かけて、こうPRを今、一生懸命やられてるんですよ。

○中根幸雄委員 そうです。やってますよ。

○鈴木延良委員 そうすると元気な人でも、まずそういう相談に行かせていただいて、安心をしてもらうっていうようなことを、今、一生懸命やってますですよ。

○中根幸雄委員 そうですね。これからどんどんそういうことがふえますのでね。

○鈴木延良委員 夜でも24時間対応で。

○中根幸雄委員 あ、やってますよ。僕の、自分の患者さん三、四人、やっていただけてます。

やっぱり夜中に家族が不安になったときに、もう、全部僕のところに直接電話されても、僕の体がもたないもん、正直言ってですね。ですから、まず看護婦さんが行くんですね。現実、現場へ行って患者さんを見るんですね。で、こうやればいいよとか、ちょっとこの薬を飲みましょうとか。で、本当に悪い場合は、僕のところ連絡が来ると。だから、そういう一つゲートをやってくれるので、大変助かっています。

○加藤直詳委員 それは、ごめんなさい、市の。

○中根幸雄委員 市の、そうですね、新城市の組織ですね。

○鈴木延良委員 鳳来にはね、8人ぐらい、7、8人みえるんですよ。で、それを新城市内、まちなかから、ずっと鳳来からね、作手のほうまでずっと回ってる。で、当番の人は携帯持って家に帰って、鳴ればもうすぐ飛んでくっというシステムらしいですよ。看護師さんですからね。

○中根幸雄委員 大変よくやってみえますね。

○小笠原喜好委員 そういう年代の人がうちにおったりなんかせんとわからんよね。そういう状況っていうのはね。

○加藤直詳委員 外傷性の、ね、やっぱり外傷などだと、そういった方々には、だちょっと時間かかってしまったり、外傷であれば直接。

○今泉英明委員 指だからですよ。

○中根幸雄委員 恐らくですね。

○今泉英明委員 結果的には、一人、二人ね。

○中根幸雄委員 ここの、この辺のけがはですね、非常にここの三角形、何とかの三角形っていう、この辺のけがは、ちょっと切っただけでもう、いいかげんな処理をすると将来動かなくなることが。専門家に任せるっていうことになります。そういういろいろあるんです。

○小笠原喜好委員 プロとアマチュアのの違いで。アマチュアやったらわからんもんね。

そういうことっちゃうのは、結構あると思う。僕らの仕事でも、例えば地元の人に仕事にあって、今度こういうものができるよと言ってもね、相手はアマチュアなので、こっちはプロなもので、1回説明すれば相手はわかると思っちゃうと大きな間違いで、3回も4回も話をせんとわからんということなんで、結構行き違いがある。それと同じようなことがどの業界でも多分あるじゃないのかな。

○加藤直詳委員 ある意味、緊急の医療体制であったり、産科の体制というのも、まあまあ、多少の不便はあるのかもしれないけれども、全く整ってないわけではないですもの。

○中根幸雄委員 そういうことですね。いつときは不安な時期があったんですけども、今はそうむちゃくちゃ悪いわけではないということですね。

(Bグループ討議)

○鈴木太委員 今、事務局のほうから紹介がありましたように、このアンケートの内容について、特に、2ページ目ですと、いろいろな項目が上げられて、今の市民、それぞれの住民の皆さんの思うところが上げられておりますけども、この結果をご覧になられて、それぞれ皆さん、思われるところ、感想等を、まずはざっくばらんに、まず、それをお話いただければと思いますので。最初、順番にぐるっと御発言いただけますか。梅津さんから。

○梅津浩史委員 アンケートの結果を見るとやっぱり前回もいろいろな話があったように、結構、新城の優れている点は、やっぱり自然が多いねというところがクローズアップされているかなというふうに思います。ただ、やっぱり不便はというところで、前回も何かやっぱり前から言っていました、地域医療関係で、ここはやっぱり一番大きな人口というか、住んでみて大変ネックになってるのかなということ。この二つを見ると、そんな。ただ、あと後半は、やっぱり前半と一緒にいいところがあるわけですから、ここの中の部分を含めて、やっぱりいかに全てが網羅できるわけじゃないんで、この強みと弱みをきっちり分けて、弱いところをどう、いかに市として、市なのかどうなのか、行政としてどうするのか。この中では見えてくるのかなと。ある意味、こういうふうに、先ほど、特に、よそから住みたいですかというのは、結構

「いいえ」が多くなっています。

○鈴木太委員 済みません。菅谷さん、お願いします。

○菅谷浩久委員 アンケートの結果を総合すると、どっちもどっちなんですね、迷っていないというか。「いいえ」「はい」が半分ずつ、そこが一番の問題点じゃないかと思うんですね。

○鈴木太委員 はっきりしない感じが。

○菅谷浩久委員 そうすれば、対策のしようがあるんですけど。結局どっちも半分ずつだから、だからやっぱり、こっちの期間こっちの対策じゃないかとか、そういう二面性のもって感じ。実際、それを1本にというのはちょっと、このアンケートの結果から見て、ちょっと感じた。それとやっぱり良い点はさっき言われたんですが、要は自然がある事によって、交通機関の発達を妨げる部分と相反するんで、どっちつかずと思うんですけど。

○鈴木太委員 見方とか、捉え方によってみたいな感じですよ。

海野さん、いかがですか。

○海野文貴委員 アンケートについて言えば、やはり皆さんがおっしゃられるように、この地域というのはやっぱり強みというところで自然、住む上においては自然がいっぱいありまして環境的には悪くないだろうというところなんですけれども、ただ、弱みというか、そういった部分については、やっぱり医療とか、それから働く場所とか、お店が少なかったり、そういったところが、もうちょっと充実すれば住みやすいところなのかなというように、こういう部分がアンケートでは読み取れるんじゃないかと。

○鈴木太委員 権田さん。

○権田知宏委員 アンケートについてですか。

大体予想の範囲内の回答かなという気がします。結局、設問の仕方がそういうふうになっているので、このアンケート自体はこうい

う結果はしょうがないという言い方はあれですけど、大体想定範囲内ということだというふうに思いますけれども。産業という面からいけば、やはり交通機関、雇用の場が少ないとか、確保とかというのが、多少出ているので、その辺は注視していきたいと思います。

○鈴木太委員 青山さん。

○青山勉委員 前は欠席して申しわけございませんでした。

今のアンケート結果によりますと、今、住んでいる人は居たいということです。自然があつてとか、もと住んでいるからということで、ただ住んでいる方たちはどんどん高齢化していきますし、また子供たちも外に出ていくから人口は減少していく。じゃあ市外の方たちは新城に移住するかという答えはいいえのほうが多かった。やっぱりいま一つ魅力がないということかなと。その理由のほうは医療の面、交通の便、就労の場がない、子育てがないという、今まで討議した中でやっぱり問題点が出ているのかなと。こういったものを何か課題として解決していかないと、外からの人は望めないというのが結果には出ているかなと思います。

さっき異業種の連携ということで、今、見ると医療や交通、また就労、子育ての部分ではかなり異業種の問題であると思いますので、そちらの業種が連携していくと何か一つ、導き出せるものがあるのかなと思います。

以上です。

○鈴木太委員 ありがとうございます。

いろいろ意見がある中で、やっぱり自由記述を見ても、病院の問題の不満ですとか、また交通機関の不満とかもあつたんですけども、あとはやっぱり若者が少ない理由としては、やっぱり働く場がないですとか、新城の駅前がなかなかぱっとしないですとか、そういったお話がありました。

冒頭申し上げたように、前はここのグル

ープの中で異業種の連携をもっと組んでいて何かできないかというような御発言が前回あったかと思うんですけども、ちょっとここからはそれぞれ、思いつく課題など、ざっくばらんに御発言をいただければと思うんですが、一口に異業種連携といっても、いろんな形があったりですとか、いろんな効果があると思うんですけども、それぞれ皆さん思われている異業種連携とか、異業種交流という中で、期待されるもの。こういう問題解決をしたいですとか。あとは、この部分を伸ばしたいですとか、異業種交流から、こういうものを生み出せるんじゃないかですとか。異業種交流から、この地域の中に何を生み出していくかということ、またちょっと、それぞれ思いつくままに、ここから御自由に御発言いただければと思うんですけども。

○梅津浩史委員 思いつくままだと業種、農業と何とか、こういうふうなイメージなのか。どんなイメージを皆さんがされているかな。前回も農業となんか、異業種っていうか、コラボさせたいということ。

○鈴木太委員 前回の議事録を見ても、観光と農業とみたいな話がありましたけども。

○梅津浩史委員 ここでもやっぱり出ていた、さっき自然が多い、ここを強みとすると、やっぱり農業なのか。そういうところと観光とがタイミングになって。まずは、できる範疇からすると、そこなのかな。僕も良くわからないなかで観光、県民の森を歩くのがいいのかどうかは別としても、何をじゃあやっつて。じゃあ農業の方々からすると、こんなことできるよというのがあるのかが、少し。私からは自然を生かして、この前、何か制御してやるとお金がないからだめだという、一番か二番目に言われたこと。そうすると、やっぱりそこへお願いをするということになるのかどうか。そこが今すぐというと、企業と企業はなかなか難しいだろうとは思いますが。そういうふうに考えたほうがちょっといいのかな

あと。

○海野文貴委員 私の住んでいるところ、出沢地区といいまして、そこで鮎滝というのがあるんですけど、そこに公募して、もちろん加藤さんとか、国のちょっとお金も若干いただいて、やって。今年度というか、去年の夏なんか結構50人ぐらいファンの方が来ていただいて。まあまあそこで魚をとって、いろんな地元の農産物を売ってみたい、楽しんで帰っていただいたという経過。村人が出て歓迎をしてみたい、そんな取組みなんですけども。一つには、そういった自然をもとにした観光資源みたいなのも生かして呼び込むというのはいいかもかもしれません。今ちょっと、少し突拍子もないかもしれませんが、中国の円が今ちょっと安くなってきて、すごく注目されて、爆買いといって、この間もバスからおりてくる人が中国人ばかりみたい、そんな感じで。何か、パターンのには東京、京都みたい、何か富士山を見てみたい、そんなルートが結構確立されて。結構、中部地区というのは中間点らしくて、そのあたりに安い宿に中継点として泊まって、また京都に東京に行く、そんなバスのパターンができるような、ちょっと外国の人も呼び込むにはいい地域かなみたいに思ったりも。観光ということで相当なお金を落としていってくれるんじゃないかという期待も。

○鈴木太委員 やっぱり既存の、今、新城にある企業さんにとって、異業種連携から、例えば雇用を生み出すですとか、新たな活性を生み出すですとか、そういった可能性という言い方はあれですけども、というような観点からですと。

権田さん、異業種交流なんか、これまで連携されたことがあります。

○権田知宏委員 青年会議所もそうでしょうし、商工会もその部類に入るのかもしれないですし、いろんな団体があっっている業種の方が集まる会議というのはいろいろある

んですけど、異業種交流というとはやはりそれだけではなかなか前へ進まなくて、従業員同士の交流であったり、企業が持っている技術の情報交換だとか、同じような技術、もしくは、丸っきり違う技術かもしれないですけど、よくある町工場の集合体みたいなので新しいものを開発するとかというのが多分イメージにあると思うんですけど、そういうほうへ向けてやっていくことで、新しい産業を生み出したりするということは大切じゃないかなと思います。それによって、例えば雇用の場が増えたり大きな製品がいろいろ外へ出ていくようになれば、この辺も雇用の場も増えるだろうし、人口増にも多少貢献できるんじゃないかなという意味で、多分、異業種交流ということで発言が出たと思うんです。その辺は、なかなか難しいところがあると思うんですよ。それぞれやっぱり企業には秘密もあるでしょうし、表に出さない技術とかもいろいろあるので、岐阜あたりではその辺も包み隠さずやるというような会をつくったというような噂も聞いていますが、なかなかやっぱりうまくいかなくて、途中で脱退したりとかいうのがあるので、その辺も含めて検討する余地はあると思うんです。

例えば農協さんとどこかとか。農業をやっている個人の方と全然違う企業ということのコラボレーションができると思うので、そういうのもいろいろ情報交換しながらやっていくといいかなというふうに。以上です。

○鈴木太委員 実際そうやっていろんな業種の連携で新しい産業を生んだり、雇用なりという点からですとどうでしょうか。ほかに何か御意見とか。

○鈴木太委員 青山さん、業種の連携ですかというと。

○青山勉委員 そうですね。なかなか医療・福祉の分野では難しくて、そういう産業が連携したあとに、福祉が補完するというふうなんですけど、そういった農業を中心に、

その観光、また中国のほうにということで、そこまでアピールするには、ITみたいな形でどうやって情報を発信するか、できるかというような、ただ単にIT産業のほうをそこで連携させるというのもありますし、先ほど権田様が言った新しい産業を生み出す、それぞれ技術出してそのブランドを外に出すという。私もさっき言った自然というのがありますので、農業を中心にいろいろと業種が連携してやっていくのはどうかなというのを思っていますけど、はい。

○鈴木太委員 実際に、私も働いているものとして、ほかの会社さんと連携して新しいものができて儲かればそれにこしたことはないと思うんですけども。なかなか異業種にしる同業種にしる、連携してこう何かをつくり出していくって、今、権田さんが言ったように、誰もが思ってもなかなかこれはできていかない部分が多いと思うんですけど。問題点が例えばどういったところにあるかですか、どういった人が率先して仕掛けていくと生まれやすいのかというのは、みなさんその辺が仕事されている中で。

○権田知宏委員 例えば、僕らは建設業でするので、同じ建設業で5社とか10社とか集まったときに、いろいろ会話に出るじゃないですか。こんなところがだめだよとか、いいとかという。それだけでも、まず最初は技術革新とかにつながるの、その辺も最初の一步かなというふうに思うんですが。そこから、また広がりがあるかとか。まずは、多分同じような業種の関係で、それぞれ困ったところとか、技術をお互いに向上させましょうというようなところから、最初始まるんじゃないかなと思うんですけどね。とりあえずは、最初はそんなところじゃないですか。異業種でなかなかすぐにとというのは、なかなかいけないので。でも、何かしら、そういう情報がいろいろ入ってくれば、どこかにヒントがあったり、気づきがあったりすることもあるので、

すぐというわけにはなかなかいかないと思うんです。先ほど言ったみたいに、それぞれ会社、自社の強みの部分を、もしかしたらみんなにオープンにしないといけないというところもあるので、その辺も含めて難しいところはあると思いますけどね。

○梅津浩史委員 大変難しいですよ。うちもタイヤ会社だけど、勤務地も多いし、どことコラボができるかなと考えたことがないわけですからね。今、言われたように、同業種でもなかなか一緒には。

○菅谷浩久委員 口で言うのは簡単だけどということですね。実際じゃあという。

○梅津浩史委員 異業種って、全然違うものでなにかが生み出せるかどうかとかということになると、う～ん、利害関係が出ると思う。なかなか難しいと思うんですね。

○海野文貴委員 梅津さん、古タイヤなんて、何か処分するんですけど、それは何か燃やしてその熱を。

○梅津浩史委員 全部セメント工場だとか、99%はリサイクルに今なってます。

○海野文貴委員 農業やったビニールハウスとか、それから、苗箱とか、ああいう化学製品というか、大量に出るんですけど。そういうのをセメント工場へ持って行って、それで熱で使うという話。で、ちょっと、僕、最近思うんですけども、農協で例えば木を切る、鈴木さんとこなんかいっぱい切ると思うんですけど、そいつをどこか捨てるというのは産業廃棄物になるんで。

○鈴木太委員 なりますね。

○海野文貴委員 処分に困るんで、自分家の山へ持って行って捨てるとか、そういう形ならいいと思うんですけども、産業廃棄物という、木を木とかにいっぱいあるので、この間、ちょっとNHKのテレビ見てたら、それをチップにして発電をおこす、バイオエネルギーですか。そういう工場みたいなのをNHKやっとなって、全国たくさん何十カ所かあ

るみたいなんですけど、ちらっと見たら愛知県では常滑とか、あのあたりでちょっとはあった。このあたりはないですね。岐阜とかも結構あるんですが。木質チップというのは90%以上熱量に換算できるということで、そういう発電所とか、そういうので熱を使った、お湯を沸かして農産物をつくるとか、そういう何か、木材をエネルギーの生産にできたら助かるなというふうには思っています。それで、問題は地域が疲弊して、僕は出沢というところに住んでいるんですけども、近くが大海という街があるんです。そこに1軒だけ店があるんです。そこももうやめてしまう。鈴木さんのところの大野のまちの中にも店があると思うんです。あそこももうじきやめるという話で。もう半径何キロぐらいがもう、あそこがやめたらお店なくなっちゃうでしょう。私のところは長篠とかあそこまでいけばあるが、とにかく地元の人にはなくなってしまう。町の中でもそうですけどね。

問題は、なぜ、そういった形になったかということ、地域でお金が回らないと。回らないということが一番問題であって、みんなどこかへ買い物に行つてよそへお金を落としてしまう。やっぱり地域で回すお金をどうするか、どうやってつくるかという、その部分においても、やっぱり一番はエネルギーに消費される、暖房でも何でもそうですけども、市で何十億円か、何百億円かわかりませんが、かなりエネルギーとして、中東だとか、あっちのほうへかなりお金がいつていると思うんですけど、そういった部分をこの地域の中でエネルギーを生産して、そして出てる部分を減らしていく。地域でお金を回すみたいな、そういう産業みたいなものができるといかなというふうに思うんですけどもね。木材だったらいっぱいあるので、そういうのをチップにして、そして、それをエネルギーに変えて、国の補助金とか何かそういったもので工場を建てて、できたらおもしろいなとい

うのがあります。我々も助かるし、外にお金出ていかないし、住民も喜ぶし。テレビで見たのは、何か灯油代が半分に、何か1カ月分灯油代がNHKで安くなったよみたいな。いいところばかりしか、大体、問題点は、そういうつくりになっているの。一番問題なのが運ぶ費用。運ぶというそのラインがなかなか確立されていないので問題みたいな気がした。そういったことができればおもしろいなど。ある意味、何か異業種、エネルギーと森林組合が協力して生み出して、木をどこかに集積する地域交流圏みたいなをつかって、それで買い取って、そいつをエネルギーでも何でも売電とか、地区ごとにエネルギーを供給するみたいな、そんな部分ができればおもしろいなどと思って。

○海野文貴委員 商業ベースはちょっと無理ですね。やっぱり行政とか、そういった国とか、そういった補助とかはね。

○鈴木太委員 ただ、今、お聞きしようと思ったのが、ある業種で要らないものがほかの業種では要るものだったり、ということが、全然知らずに進んでいるっていうパターンが多いと思うんで、その中で、業種の連携の中ではなにかしらが見い出されてくる。

○海野文貴委員 間伐材とか、ああいうの持ってってくれんかなあと本当思いますよ。

○半田農業課長 今言った木を出すと、1立米当たり1万2千円とか掛かっちゃうんで。それが採算が合うのかというところになってくるんですよね。ですから、木を集めようと思っても集めれない。機械化を今進めておるので、チェンソーで切ってそれをスイングヤーダでつり上げて作業道まで出して土場まで運んで、そういうことをやってやっとなら1万2千円に下がってきている。ですけども、もう当然、用材として使える物は市場に出して売らないとお金にならない。それがA材。B材となるものが、集成材に挽くラミナ材というのが。C材というものはチップになるもの。チ

ップになるものというのは、いろんな繊維しか取引ないんですね。ですから、そこで中間経費がとられちゃうと、もう何もならない。商売にもならない。燃やすものとして、4千円で運んでまた工場まで持って行くと、赤字になってしまうというところがあって、なかなか難しい。だから、大量にそうした取り組みをつくれな、採算が合わない。ですから、全国的に木質バイオマス発電所つくってしましても、もう拠点ごとにつくらざるを得ないということなんで。バイオマス発電も効率的には電力に変わる部分が20%台でしかない。あとは熱で捨てちゃうんです。大量の水で、もう冷やしちゃう。冷やさざるを得ない。ですから、工場に近いところなら温室の熱源に使えるとか、ああいうことがあるんですけど、地域の暖房熱に使えるんですけど、やはりそこら辺が効率の問題で非常に悪い。

川崎では廃材のチップを使ったバイオマス。東北のほうでも震災でいっぱい廃材が出るのであちらもそういった発電。廃材であれば破碎と運搬だけですから、できるんですけど、採算が合えば。

ですから一遍に出てくるC材を流通に乗せることによってできるということ。ですから、そういった体制ができないと。

○鈴木太委員 実際に、異業種のいろんな情報交換の中で、今みたいなお話ですと、そういう可能性が出てくる。

○半田農業課長 農業課でも特産品を作ろうと思って、一昨年は相模女子大と連携して農産物を使った加工品を考えてもらおうと、ことしては、豊橋調理製菓専門学校として市の特産果樹を使ってスイーツを作ってくださいとお願いをしたり、そういったこともやってるんですけども、なかなか、やっぱり異業種といますか、専門家は専門家ですので、やはり考える人、目をつけるところが違うというところがあって、非常に参考にはなる。

○鈴木太委員 異業種にしる、同業種にし

ろ、連携だとか、交流情報交換の場を、業界のいろんな集まりの中だけで仕掛けていけるのか。誰かかしらが、商工会じゃないけど、そうやって音頭をとって動いていけば生まれていくのか。

○鈴木太委員 商工会さんってそういう企画されたりってあるんですか。

○権田知宏委員 講演会みたいなので、自主的に参加してくださいみたいなのはありますけど、表だってこういう業界とか異業種で交流しましょうという事業は、今はありません。

○鈴木太委員 要するに難しいんですか。

○権田知宏委員 難しいと思います。

ただ、そういうのをやっている商工会、商工会議所というのがあるのはあるですよ。

○鈴木太委員 たまに町屋に、金融機関さんが、何か集めてやられていますよね。

○権田知宏委員 金融機関は、地銀の方はやられているけど、都市銀行さんはやってない。

○鈴木太委員 誰だって、いろんな同業異業連携の中で、多分、それこそ今言ったようなお互い補完するものですか、さっき言っていたように新しい産業が生まれたりですか、雇用が生まれたりという可能性はあるんだろうと皆さん感じられるんですけども、それが進んでいかない一番の原因ってやはりどこなんですかね。誰かが仕掛けないからなのか。逆に、自分のものは出せないからなのか。

○権田知宏委員 その質問は抽象的過ぎて、非常に難しい。難しいんだけど。

そういう意識のあるという言い方ですけど、例えば、異業種とかも交流したい経営者の方とか業界の方とかというのは、それはあると思うんですよ。だけど、そうじゃない人も、そうじゃない業種の人もおったり、同じ業種だけど経営者の方針でそういうのが嫌だとか、やらないという方もいるので。それは誰か音頭をとるとか場を設定すれば、

意識の高い人だったり、興味ある人は来る可能性はありますよね。ただ、そこから先どのように進めるかは、また、集まった人たちなり、音頭をとった人の進め方次第だと思うんですけど。

○海野文貴委員 権田さんが言うように、やっぱりくっつける人がいないというのがあるんですよ。なかなか畑が違う分野にいくと、知らないことだし、何か、新しいものの開発というのも、結構な資金源がいりますし。地銀さんだとかくっつける人だとか、そういった音頭をとってくれる人とか、観光だったら安彦さんだとか。考えて、仕掛けをするような、そういう人がいないとなかなか難しいかもしれない。

○権田知宏委員 農協、銀行業務やっているもんね。

○海野文貴委員 細々とね。

○権田知宏委員 全国ネットじゃないですか。地銀は、自分とこの貸出先を育てないといけないので。その利害関係があるけど、ここはないみたいなもんで。

○鈴木太委員 銀行さんは、そうやって生んで、いろいろなところを活性化してくれりゃあ、それで自分ところに利益返ってきますからね。

○権田知宏委員 みんな、それはどこの企業さんもメリットがあると思えば、それは参加したり協力したりしようと思うことがあるもんで、その音頭をとる人がこんなメリットありますよという方が。あんたんとこ来たらいいよって言うようなもんじゃないのか。

○鈴木太委員 雇用がないっていうような意見がありますけど、結局今度は新東名からくる企業誘致だのみですか。何か市が黄柳野小学校の跡地で興す業の何か支援施設って考えてますけど、こういう新しいものだけにしかなってかないと思うんで。

黄柳野はそうやって新しい起業家さんの施設に改修とか手を加えるという方針があるみ

たいで。作手の菅守小学校なんかは、地元の方で今レストラン。

○権田知宏委員 一部ね。

○鈴木太委員 一部でやっていますよね。

○権田知宏委員 あとは返したんで。全部は使えないので、一部を借りてというか、借りてレストランにしていますけど、週、多くて3日ぐらい。巴小学校もこれでなくなるんですけど、そこは一応、まだ、もういいかな多分、市長に答申したのでいいと思うけど、農業の農業従事者、新規農業従事者の受け入れ先施設みたいなので一応申請するという事です。なかなか難しいんですよ。

○鈴木太委員 これから多分、まだ増えていくでしょうからね。

○海野文貴委員 小学校で農業就農者としての研修施設みたいな形で使うとか、どういうふうな。

○権田知宏委員 最初は研修施設です予定だったんですけど、そこへちょっと直して住めるようにして。

○鈴木太委員 住宅？

○権田知宏委員 住宅。理由は市場だけじゃないですか。農業何とか地域とかいって、ハウスが建てれたり。だから、ちょうど真ん前というか、中心に農業の新規就農の方が、結構作手の方へみえて、何人か来ているので、その方たちの住まい、空き家とか、空きアパートとかというのもあったんですけど、それじゃなくて同じように就農する人が集まって相談できるような環境ということで、そこ一戸空けるとか、話しが一応上がってるみたいです。

○鈴木太委員 別にそれって、空き家を使ってというのが嫌がられてとかじゃなくて。

○権田知宏委員 空き家もね、あるんですけど、結局、なかなか貸してもらえないとかいうのもあったりして、アパートも空いてないことはないんですけど、それだったらばらばらに住んでやるよりも1カ所に集めて農業の講

習の先生も来るときもそのほうが楽だしとか、何かいろいろ言っとったけど。

○海野文貴委員 空き家になってても、名古屋に住んでてたまに帰って来たりとか、それとか、やっぱり人に使われるのが嫌だとか。

○権田知宏委員 あと、仏壇がまだ置いてある人がいるからね。本当に古いところは、家の裏側とかにお墓がある人もある。いろいろ難しいだよ、すんなりとはなかなかいいです。

○海野文貴委員 なかなか貸してくれないんだね。

○菅谷浩久委員 捨てるっていう事は、人間なかなかできないじゃないですか。

○権田知宏委員 特に、昔の人はね。何でも取っとけとかいうんで。

○菅谷浩久委員 だから空き家も当然とってあるんだろうし。ひとつは税金上げちゃって、そういうのも、固定資産税が高ければ手放さざるを得ない。

○権田知宏委員 今度あれでしょう、上がるんじゃないの、空き家の税金は。それはまだ検討中のやつか。

○菅谷浩久委員 高いじゃないけど、そうすれば活性化は。住みにくくなっちゃう。

○鈴木太委員 空き家対策は進まないですよ。

○梅津浩史委員 しょうがないんじゃないですか。なかなか今の話を聞くとね。

○権田知宏委員 難しいですよ。まちなほうでも、結構空いているところあるんですけど、相続の関係で流通が結構ありますけど、田舎のほうはそうはない。

○梅津浩史委員 今、閉塞感が、さっきの異業種もそうですけど、なかなか閉塞感があるんで、課題は何を打破するか。先ほどの木を出す話もどんどん深く入っていけばこれは多分無理だなと思うし、そうやって思うと、各事情を聞いて、今言われたように商工会なり、どこか、そうだよってなるところまで

いくかどうかがやっぱり難しいと思うんで、それで思うと、やっぱり今少しでもアンケートの中から何か課題をつぶしていかない限りは次にはいかないのかなというのが、どうも答え的になってくるのかな。いや、さっきちょっと老人ホーム介護とこども園なんかをくつつければ、さっきお子さんが見てもらいたくても、遅くまで、もしかするとそこのヘルパーさんが見てくれたりね。

○菅谷浩久委員　じいちゃん、ばあちゃんに、子供を見てもらうとか。

○梅津浩史委員　それで、要は仕事、女性の方が長く仕事ができるねとか。そんなことは一回考えて、やっぱりそこも、介護大変だと思うんですよ、うちの息子もやってるんでね。もうそんな見とる暇がないよと言われると、もうそこで異業種交流は無くなる。そういうふうに思っていると、やっぱり口では簡単ですが、そこの中に入っていくと難しい。

○青山勉委員　アイデアを出しても、なかなか聞くとは、ああ難しいなど。さっきの介護のほうも、そういうふういろんなものを立てればというんですけど、人手不足ということで雇用のほうが難しい。だから、別のところで雇用を持ってそこから介護というようじゃないと、なかなか介護のために人が来るというのは。来ないですかね、今は。だけど、先ほどやっぱり商工会の方、やっぱりプロフェッショナルですので、ちょっと聞くと、すごく事情も知っているなどと思って、やはり何か旗振りというのが必要なかなと思って、一番ノウハウが、一つ。

○権田知宏委員　帰って職員にそう申し伝えておきます。やってって言われたよ。

○青山勉委員　こういう情報を聞くと、いろいろとなるほどと、さっきのアイデアもあった。これはいいなと思ったら、やっぱり行政の方は、もうその辺は詰めていた、もうだめだということが。新しいブランドも、いろいろと今、試行錯誤、以前からしていたと聞

いてますけど、なかなかそれがうまくいかないというのがあって、皆さん努力はされているのかなということで。やっぱり情報を聞くと、思っていた以上に難しいなと思いますけど、やっぱり何回も出していくと、何か一つのものが生まれてくるのかなと、はい。旗振りというか、そういうプロフェッショナルの人が、今までやってないことを引き出してくれるといいなど、はい。

○権田知宏委員　産業振興総合振興条例の条例がまとまったら、別で僕らは、新しい今度、異業種交流の会を、皆さんに参加していただいて。

○鈴木太委員　言われたみたいに、いろんな産業同士で、多分、検討して立ち消えたものは多いとは思うんです。それでもいろんな業種間で渡ってって、誰かが旗を振って、とことん突き詰めてって可能性を見出していくのか、いけるところまで見出したものを、他地域との連携というのがありましたけども、今度は市外に出して可能性を探ってみるですとか。

○菅谷浩久委員　でも、今はそういう世代間の交流、子どもとお年寄りをくつつける、そういうのって、やっぱり、何か資格がないとできないんですかね、子どもを見るという事が。

○青山勉委員　子どもの分野というと。

○半田農業課長　放課後児童クラブ。

○菅谷浩久委員　そうそう、そういうやつ。

○権田知宏委員　今あるかどうか知らないですけど、長久手にはもう何年も前に老人ホームと幼稚園が一緒になった施設が。ちょっと仕切りがありますけど、交流ができるようになってるものもあるし、それのほかにもあったような気がするんだけど、何カ所か。ただ、難しいですよ。

○青山勉委員　そうですね。

○菅谷浩久委員　これだけ荒廃した社会の中じゃないけど、その中でやっぱりおじい

やん、おばあちゃんと子どもっていうのを結びつけるとすごく優しい街になる感じがする。おじいちゃん、おばあちゃんでも一人とかそういう孤独じゃないけど、そういう人もいるし、そしたら満たされる、心的に満たされる。犯罪も少なくなる。そういうのを作りゃあ、若者が働くのは当然だと思うんですけど、お年寄りでも働ける場ができる気がする。

○鈴木太委員　そういう施設が活性化すれば、またそこで若い人の働きでも増えてくるのもあるでしょうし。

○菅谷浩久委員　でも、やっぱりね、違う何か効果が、そういうこと、何かやるかやらんかによってさ、やらなかったら何も変わらない、何かやってみるといのは必要。トライする。

○半田農業課長　放課後児童クラブっていうのがあって、中学校区単位ぐらいでそういう学校が終わってから、あるんですけど、そういうもの、体制は。そこへ先生だとか保育士さんのOBの方が仕事をして、迎えが来る。

○岩田長寿課長　時間が決まっている。要は、やってる方もある程度若い方なものですから、いつまでもというわけにはいかない、家庭があるものですから。ですから、ちょっと資格のことはちょっとわからないですけども、ただ、預ける親御さんが全然資格のない人に預けてお願いしますといったときに、万一何かあったときに、というところで、多分、皆さん募集すると、ある程度そういう資格のある方ということになってくるんじゃないかなと思うんですけど。

○梅津浩史委員　事故があると、市の行政にたしてはかなり。なかなか難しいと思う。

○岩田長寿課長　そういう人が引率して、高齢者とふれあう場を設けるといのはできるんですけども、ずっと同じようにという、なかなか難しいところあるかな。前に経験があるとかそういうのでないと、高齢者であっ

ても、もっと経験があれば。

○青山勉委員　異業種って言いましたけど、さっき。老人とやはり子どもと、例えば、法律も違うもんですから、案外知らない部分も多くありまして、やはりそういったのもコミュニケーションとっていくと、やっぱりこちらでそうやって世話できる高齢者を抱えているよ、じゃあこども園に行こうとか。逆に、子どもたちもボランティアに来ようということで、そういう相乗効果も、そういった子供と老人が一体となって施策というのも、これからは多分、必要になって。地域創生で、やっぱり新城市独自の福祉施策というのがつくっていかなくては、3年間の間ありますので。やはりもう我々自身が、今、子供という、知識もなかなかなくて、長寿課のほうも老人のほうはむしろなんですけど、そこからまず壁を取り払って一体とっていくという、さっきのやっぱり異業種もそうですけど、何か取り払って知識を得ることで、いいアイデアも浮かんでくるのかなと。これも、具体性はないんですけど、それに福祉をまず前面に出すのか、農業を出すのか、産業を出すのかというのが、まず、どれに。全てがなればいいんですけど、まず、何かを柱にしていくのを。産業になればすぐにお金が出て思っちゃうものですからあれですけど、なかなか福祉のほうはじわじわと来るとい。農業も先ほど自然というのがすごくイメージがあったもんですから、何かすればさっとできるかなと思うと、なかなかいろいろな問題もありますので。

○菅谷浩久委員　何かやろうとすれば、絶対問題はあると思うので。その問題をどうやって解決するかということで、だんだん。

○青山勉委員　そうですね。今やっぱりこうやってコミュニケーションをすることによって、これはだめだとつぶしていったら、そうすると、何となく方向性というのが出てくるのかなと。

○鈴木太委員　すると、先ほど自然が多い

と公共交通機関の未熟さが相反するという意見があったが、違う業種から見ると、違った立場から見るといいものが悪く見えたりということも。

○菅谷浩久委員 そうそう、立場によって、見方によって。

○鈴木太委員 この間のビジョンフォーラムさんの講演の話じゃないですけど、空き家がただ単に古い家と見られるのか。よそから来た人が自分の好き勝手にリフォームとか手を加えられる家というふうに見えるのかということもあると思うんで。見方によって活かし方の違い。

○権田知宏委員 おれ、聞けんかったもん。ビデオを家で。

○梅津浩史委員 さっきも言われていたように、必ずそこには地権者が出てくるからね。農業も、前回もそうですけど、いや、田んぼあるけど、ここにも少し家を貸してあるけど、休耕地が多いじゃないかということ。じゃあ休耕地やりましようかといったら、それはやられちゃ困るとか。そういった意味では、やっぱりなかなかね。何かを、整備をしてから話を進めていかないと。

言い方悪いんだけど、もっと、こう、今、こんな状況ですよって新城市はアピールしないとだめなのかもしれないですね。みんなでどっちを向こうかっていうこういうことの中で、少しアピールをしながら何かこう、そういう考えで行かないと。いろんなことここで聞いて。

そんなに農業ってこうなんだとか、そんなことがあるのか。先ほど言われたように、バイオマス作って横でかんかん電照菊なんか作っているじゃないですか。あんな電気高いだろうし、どうしてるんだろうなあ。そこで、そんなのやればいいのになとか思うけど、やっぱり今チップを出すのに4千円、出すだけで1万2千円かかるだとか。だから赤字だからそんなものできない、とか。

○菅谷浩久委員 熱を貯めとけると良いのにね。

○梅津浩史委員 そうそう、アイデアは出るんだけど、今言ったように、だったらどうしよう、地権者に。

僕らなんかはサラリーマンですから、ただ、家を建ててたまたま新城に住んだだけなんでね、どうしようか、ああそうか、ちょっと地域のつき合いが大変だ、よくわからないからなあと思ってるだけで、大変さが。そこはやっぱり来る人からすると、そういうのが聞こえると、やっぱり豊川とかのほうが地域つき合いが楽だぞって言われるとそっちに。

○菅谷浩久委員 寄り合いがあったりお祭りがあったり、それがうっとうしい、せわしいで嫌だというのが。

○梅津浩史委員 この前も区の総会やったんだけど、難しいです。その区ごとに長老がおり、昔の話をされても僕らは分からない。

○権田知宏委員 全然わかんないですよ、それはやっぱり。

○梅津浩史委員 そういった意味でね、もう少し掘り下げていかないといけないのかな。ある意味、魅力あるまちにするには、魅力ある人たちにしていけないと。いろいろ話を聞きながら。やっぱり、こんなものがあるけど、やっぱりこんな壁があるんだなあとかという。

○鈴木太委員 空き家対策とか土地利用は、持っている住民の方の意識を変えられるような何かがないと。

○梅津浩史委員 土地なんか買ったらね、上は建てていいよって言ってくれりゃ、それでいいのかもしれないかなと、ああいうのを。土地は離したくないというなら、50年間お貸ししますと、そのかわりお金は取らないからと。考え方だけなんです。土地貸すんだから金寄せとせという、また、いろいろ出てくるだろうし。

難しいと思いますね。簡単だったらみんなやってると思う。

○鈴木太委員 確かに。

○梅津浩史委員 難しいんだけど、みんな
で考えて。知恵を出しても壁があって。やっ
ぱり一つずつやってもらえないかなど。

○鈴木太委員 そうですよ。

○梅津浩史委員 趣味にしてもらおうと、
今の人に。そうすると大抵言われるでしょ
うね。こんなだから、こんなだから市民の
皆さんの力は。

○鈴木太委員 人口が増えていくのが、当
然一番望ましいんですけど、その起爆剤とし
て、いろんなマイナス面を打破できるだけ
のものがあれば。こういう時代だから単純に人
口が増えていくというのは、なかなか望めな
い話なんで。新しい産業を生むのか新しい企
業が来るのかで、若い人が新城に住んでく
るようになって、人口構造がそういうふうな、
高齢者が特に多いという訳じゃなくて、生産
人口が増えていくという形で内訳が変わっ
てくると、また地域が活性化してくるん
ですけど。

○梅津浩史委員 どっかうまくいって
いるところを参考にできるかどうか、こ
ういう条件の中で。

○菅谷浩久委員 似ているような市
ってのは、新城市に。

○鈴木太委員 似てるような市
ですか。

○半田農業課長 例えば、東栄の町
営住宅に入っていた人が豊田市の工場
まで毎日通ってる。

○鈴木太委員 そうなんですか。

○半田農業課長 あそこから1時間
半だか2時間かけて帰って。言ってみ
れば、新城地区と鳳来の長篠地区は市
街化、準市街化の都市計画区域です
けど、他の所は自由に農地以外だ
ったら。

○鈴木太委員 下手に新城に調整
区域で考えるぐらいなら、鳳来とか
奥のほうの、全く建築基準法の関係
ない地域で考えたほうが楽なん
ですよ。

○半田農業課長 それこそ、作手
なら豊田とどえらい違いですよ。

○梅津浩史委員 聞いた話です
けど、家を建てる時考えろと言
われて。電柱立てにゃいかんは、
水道引かにゃいかんは。そんな
ことを考えると、無いところは
建つのは難しいよね。

○梅津浩史委員 いやいや、ど
こでもいいんです。市が、建
てるまでやってくれるって
言ってくれりゃあ、もしか
したらそれが売りになる
と思う。市としてやるんだ
というところは全部。

○権田知宏委員 確かに、電
気も水道もないような
ところはあるかもしれん
ですよ。

○梅津浩史委員 近くに家
はないとやっぱり、と思
うんでね。

山の中、ちょっとしたところ
でも、軒数があると一本水
道管なんか圧力変わるから
引かなきゃいけないとか
聞いたことあるんですけど
ね。そうするとやっぱり
建売のほうが楽だし道路
も作らないかんとか。今
言われたように、建て
れる、そこいいよねと見
に行っただけでいいけど。
中電さんが1軒だけある
けど電柱立ててくれるか
という、それは無理だ
ろう。昔はどうだった
んだろうな。

○半田農業課長 中電さん
は立ててくれるんじ
ゃないですか。

○権田知宏委員 工事でも
無料で何本も立って
もらいますよ。何かあ
って、1年以上だとか
何年以上使うとかとい
うと、自分のところで
電柱ぼんぼんぼん。

○鈴木誠委員長 尽きない
テーマになってお
りますので、そろそろ
終わりにさせていただきます
かというふうに思
います。

○鈴木誠委員長 それでは
ですね、皆様、お
帰りのお支度もあ
るかと思います
ので、済み
ません。話が随分
尽きないテーマ
になって

きたと思いますので、そろそろまとめにさせていただきますかというふうに思います。

それですね、今から、きょうのアンケートを一つのきっかけにして、随分具体的な問題の抽出であるとか、あるいは対応策について話が出ておりましたので、それぞれグループでどのような話題がきょうは出されたのか、そのあたりの紹介を主にさせていただければというふうに思っています。

きょう、それぞれのテーブルにICレコーダーと、それから職員が記録取りで配置されていますので、それぞれのテーブルで、詳しくはどのような意見が交わされたのかは、後日起こして、皆様方のところにお届けしますので、きょうのところは主な意見ですね、紹介をしていただければというふうに思います。

それでは、鈴木さんのほうから、こちらのグループの紹介をしていただければと思います。お願いします。

(発表：Bグループ)

○鈴木太委員　こちらのグループではですね、アンケートの回答の中から、やはり雇用の場がないですとか、働く場所がないというところ。それと前回、Bグループでは異業種連携ですとか、同業種連携ということが出されて、そのこのところを中心に話をさせていただきました。

やはり異業種にしろ、同業種にしろ、連携することで新しい産業が生まれているとか、そこからまた新たな雇用が生まれるということは、非常にこう可能性としては持っている。なかなか、それが進んでいかないというところも、実情ではある、というところが現在の問題でありました。

やはり、じゃあどうしようかというところで、同業種連携の中で、こういろいろな情報交換を進めて、そこからさらに異業種に広げていくというような取り組みをしたいですとか、また異業種間の話し合いの中で、ある業

種にとって捨てるものが、捨てる神あれば拾う神ありではないですが、ほかの業種にとっては、自らの仕事に活かせるということですね。実際に、農業関係の立場から間伐材をうまく有効利用できないかと、木材あっても処分するのは産業廃棄物になるので有効利用できないかというようなところからですね、いろいろな可能性も検討したり、というところではありました。

やはりこのグループの中で話しのあった中で、そうは言ってもなかなか、誰かがこう話を持っていかなければ進まない。じゃあ、その役割を市が担うのか、商工会が担うのか、よく言われるように金融機関さんなどが担うのかということもありますけども、皆さんこう、ここにメリット、可能性は感じてはいても進んでいかない。誰かがこう、旗振りになってですね、それぞれのいろんなメリット、デメリットを出し合って、異業種連携を進めていくことが、新たな雇用の場にしろ、産業の場として必要ではないかというところが挙げられておりました。また、そこからいろいろ話が派生する中で、今、新城市の作手小学校を新たな起業家参入の施設にということで計画が挙げられておりますけども、実際作手のほうでもですね、廃校が地域の方のレストランにっていうふうに活用されておったりですとか、小学校ですとか廃校の利用というものですね、これからはこの地域の一つのきっかけにつながっていくのではないかという点。

またそうやって、そういう利用から新たな人が来たときに、じゃあ、空き家対策ですね、空き家の利用をどのように進めていくのか。やはりこう田舎の方の意識として、先祖代々持ってるものすとか、やはりこうつながりをもっていきたいということで、なかなかこう手放さない、貸してもらえないっていうことが多いので、そういったことに対しては、実際に行政からの発信でそういった方の意識

を変えてもらうような、こういった取り組みも必要ではないかということが、挙げられておりました。

とにかく、いろんな連携ですとかつながりから何かを生んでいく可能性は、皆さん、感じていても、その旗振り役を担う方がですね、当然、いろんな検討すれば壁はあります、問題はあります。そこを、その旗振り役ですとか、いろんな連携するメンバーの中で越えていけるような形が生めていければ、新たなものですとか、あるいは産業というものが、この地域でもできるんじゃないかということで、話をさせていただきました。以上です。（拍手）

○鈴木誠委員長 どうもありがとうございます。

（発表：Aグループ）

それでは、もう一つの、加藤さんのほうからですね、お願いいたします。

○加藤直詳委員 こちらでもアンケートの中にあつたような、例えば生活するのに不便な点だとかで挙げられやすいような、地域医療の環境が整っていないとか、買い物する場所、外食する場所がない、就職、仕事がない、公共交通機関などが少ない、というような議論というのは、どちらかという、利便性に偏った意見ではないだろうか。

やっぱりこの新城の魅力を高めていくには、やはり自然が多いことであつたり、そんなところを高めていくのは、じゃあどうしたらいいのかというようなところで、少しだけ議論として出てきたのが、その自然を楽しんでいただく上で、住んで楽しむということよりも、出てきたのは、どちらかという観光系になってしまっていますが、レンタル農園だとか森林体験とか、そんなことができるんじゃないだろうかというような御意見などいただきました。

そしてよくよく言われるネガティブな地域

医療についてはですね、きょうは医師会から中根先生がお越しただけていたものですので、我々もどちらかというヒアリングばかりをしていたような状況でございまして、工場内で何かけがをされた方があつたときに、なかなか新城市民病院が受け入れてくれないというようなことがあつたそうなんです、かえって市民病院も今は大分態勢が変わってきてる。今後はそんなことはあんまりないんじゃないのかなというような御意見をいただいたり、かえって地域の個人病院などでも十分受け入れてくれるのではないかと。そして産科医がいないというような問題に関しては、やはりこの新城地域の人口であると、産科を置くには、やはり産科医が4人、5人と設置することを考えると、この人口に対しては、不可能ではないだろうかというふうにも御教示いただきました。かえって近隣の病院へ出かけるほうが、でなければ、地域、より大きな地域として見ていかないと、この新城地域だけで産科医を賄うということは、もう無理だというふうなことをお教えいただきました。

それ以外にも、既にお産の仕方、皆さんそれぞれ方針が患者さんにもあるでしょうし、その昔から、やはり自分の方針に合った病院を選んでらっしゃるわけで、必ずしも市民病院が全てを満たしてきたわけでもないですし、というようなこと。やはり自分たちも大分今ある市民病院のことを含め、世間の風評とかですかですね、世間で言われてることによって左右され過ぎではないのかなあというような、きょうはちょっと話をしておりました。

公共交通機関が少ないとか、そういったことも、やはりもうこれは全国どこの本当、地方でも言えることであつて、ということなんです、自主移行できればですね、こういった課題、より何か自分たちらしい改善できるような策を、また模索していけるような議論ができればなあということで、きょうは終わりました。以上でございます。（拍手）

○鈴木誠委員長 どうもありがとうございました。

加藤さんたちのグループは、きょうは中根先生の話に、皆さんいろいろと聞き入って、質問したりとかですね、あるいは御自身の経験を踏まえて意見を求めたり、こちらはそういうより専門的なところに踏み込んで話を深めていました。

鈴木さんたちのほうは、御自身のいろいろな御経験、仕事の経験を通じての経験交流、みんな話が深まっております。

非常にそれぞれ密度の濃いお話をいただきましたので、その内容はこれから全員で共有できるように準備していきたいと思います。

一時、今でもよく公共交通の充実ということと言われる中で、例えば、路線バスからコミュニティーバスへ、バスですね充実を図って、いつ何時でも、車の利用ができない場合にはバスなどを使って病院であるとか、あるいは役所であるとか、学校であるとかさまざまなところに出かけられるように、基盤をそろえてほしいという要望が常に出るんですけども、そういうことをこれまで充実させてきた割には、利用者がいなくて、よく空気を乗せてバスが走ってるとかですね、空気を乗せて電車が動いてるとかですね、商店街は空気を相手に商売をしてると、そんなようなことも言われたりもしました。

やはり何もかも、フルセットで用意していくということは、当然用意するための資金が必要ですし、人材も必要です。そういう声を受けて、これまで備えてきた時代はありましたけども、しかし、今、これからは多様なやはりニーズを踏まえて、今度は、既存のものをうまく生かしていくということが大事なんだと。身近で利用できる、あるいは利用すべきものと、そして例えば新城市域という全域で、うまく利活用をしていくものと、そして個人の嗜好と、それから専門性ということを

考えて、より広域で、東三河とか、三遠南信とか、そういうレベルで、やはり利活用をしていくものと。やはりこれからは、うまく既存の制度や、あるいは資源というものをうまく生かして、自分の暮らしや地域の暮らしを豊かにしていくってということが、むしろ大事なんだ。

そのときにはやはり、どのような人や物や、そしてサービスがあるのかっていうことを、なるべくわかりやすくアクセスをして、個人が理解をするということが必要ですし、家族が、その個人の理解を助けるということが必要ですし、そして、例えば地域自治区や協議会といった、新城固有の制度が、近隣の人たちのコミュニティづくりを助けていく、こういうことも必要でしょう。そして、異業種交流とか、同業種交流ということもあって、より専門的なコーディネーターというところが積極的に動いて、新しいサービスが仕事をつくり出していくということも必要になるでしょう。きょうの皆さんのお話を聞いていて、そのようなことが非常に、気持ちの中に鮮明になってきたということがありました。

私以外にですね、実は副市長が非常に熱心に記録を取っておりました。一言コメントをいただいて、それで事務局のほうにお返しをしていきたいと思っております。

○広瀬安信副委員長 何か、振られちゃいましたけど、特に、メモを取ってたわけじゃないんですが。ちょうど皆さんのほうに記載していただいたアンケートの自由記入欄がありますところを、少し読まさせていただきました。

読んで、新城のそのいいところですかね、住んでみたいだとか、いいところだとか、それから子どもさんに住んでほしいですかっていう「はい」って答えたりだとか、いい点だとかいうところに、先ほど事務局のほうから自然があるというような、自然がいいですよというようなことが言われてました。もう

少し、こう見てたんですけど、いろいろありますが、人が優しいって言うのが出てきました。これはある業界の方に聞いたんですけども、ここの地域の人って本当に優しいね、文句言わない、クレーム言わないっていうようなことを聞いたことがあります。だから、今住んでる方が、今ずっと新城住んでる方は住みやすい、ずっと住んでるから住むという言い回しであったり。

でも、外からこちらに来た人が、何がいいですか、自然っていうことを言う人もいるんですが、人が優しい、だから安心だ。それともう一つは、治安がいい、ということを行っています。治安と人が優しい、これはひょっとかしたら自然以上に人を呼び込むキーワードになるかなと思って見てました。それが地域産業とどう結びつくかっていうのはまた別の話かわかりませんが。住んでみたらいいじゃん、住んでるけどいいよ、そんなコメントが散見されたかなと思いました。

で、負のイメージですね。先ほど鈴木先生が興味を持たれてましたが、こちらのほうの話も。

医療の問題とかあるんですけど、不便というのは、交通だとか、あるいは店舗がない、買い物ができない、遊び場がない。不安というのは医療なんですけども。でも医療ってよくよく考えてみたら、結構開業医さんを含めて、ぽこぽこあるんです。あるんですね、この地域。でも、そこの中の極点が救急ですね。救急に対する不安。だから、救急車で運ばれる方は、4万9,000人の人口の中で年間どれだけいるか。ごく一部です。私たち、私もそうですが、運ばれたことはありません。だけど、運ばれたことないんだけど、万が一のときのその不安に多くの市民の方がそれを感じてる。でも、中根先生じゃないですけども、地域には開業医さんもいっぱいあるんですね。この地域よりも、もっと悪い医療関係っていっぱいあるんですよ。でもその不安が

先行してるというのが医療だとか、もう一つは学校が出てました。子どもに対する不安として、学校は将来に加わりまして、学校は文科省が統合方針を出したもんですから、余計、いろんな考え方があると思うんですけども、地域から子どもさんの声が聞こえなくなってくると、どうしても大人は、特に高齢者は不安を感じるということが出てます。

それから不便というものと、不安というものと、それからもう一つ、イメージが先行してる。さっきの医療なんかはそうなんですけども、それと、田舎って意味なんですけども、田舎って何だろうっていう。その、何ををもって田舎なのか。

東京あるいはミニ東京みたいな街が、そこらじゅうにあって、それで大丈夫なの。田舎に行って温泉に入って、ゆったりして、いやされてリフレッシュしてくるっていう、そういうのも当然必要であって。そういうのは田舎のイメージみたいなのが、またどっかで定着してる。でも田舎って何。どうも、ちょっと読みながら考えさせられました。

全体的にアンケートの答えの中で、全体的に受けたのは、やはり私たち、私もそうですが、市民、県民、国民が、やっぱり受け身ですね。発想が受け身。働く場所がない。こんなことを僕が偉そうに言っちゃ、ここにいる業界の人たちに怒られちゃいますけども、働く場所がないっていうその発想は、多分もう時代が違うって言われたらおしまいです。でも、私たちの親の代、祖父母の代、曾祖父母の代っていうと、働き場所を自分でつくってる。それが農業だったり林業だったり漁業だったりとか、土着性はありますけれども。そういう発想がなくなってね、公共に働く場を確保してくれ、創ってくれっていう、そういう発想でしかない。

これ海野さんの常々言ってる言葉で好きな言葉があるんですが、年金生活者にプラス100万の収入っていう言い方を海野さんがよ

う言われるんですけども。100万をどうやって自分で生み出すかっていうその発想を、リタイア組にこう投げかけてる。それは自分の農地だったり、あるいは山だったり、あるいはアルバイトだったりすると思うんですが。リタイアした後の、ときの自分の働くことに対する能動的な働きかけと、今の若い人たちもそうですが、社会全体がそうですが、働く場所をあなたたちがステージを用意してよみたいな、そういうことの強さっていうのが、どうも何かこう、いろんな、今回のあれもそうですが、出てるのかなっていう気がしました。

新城はやっぱり人が優しいですし、自然もきれいなもんですから、まだまだ働きかけの仕方によっては、この地域は変わるかなって思います。

最後ですが、Iターン、Jターンで、今、活気のある、あるいは人気のあるところっていうのを皆さん聞いたことあると思うんですが、1位が山梨ですよ。2位が長野です。この2県はもう十何年も前から、そのIターン、Jターンの取り組みを、めちゃめちゃ県も真剣になって取り組んでる。ようやく花が咲いてきた。というようなこと言いたいです。

長野県も山梨県もJR1本で東京から行けるっていう、その利便性はありますが、それ以外に何か、ほかにまだあるんじゃないかという気もします。これからみんなと一緒に少しでも。

あ、それから、今、田舎回帰っていう言葉が、ちょこちょこ見られるようになってるんですが、田舎回帰のキーワード、決して多くないです。まだ絶対数として多くないです。全国でも何十万人っていう状況だと思うんですが、田舎回帰の20代から30代、40代前半、30代ぐらいまでですかね、のキーワードは子育てとそれから、要は農業、林業ですよ、ああいう自然を相手にした、のんびりとした職っていうんですかね、スローな時

間で自分の暮らしを築きたいっていうような方が20代から30代にいて、50代後半から60代っていうのは、完全に、私はどここの出身者っていうから帰ろうっていう人が、夫婦がそろってですね、愛知県出身者なら愛知県に帰ってくるんですが、北海道と沖縄だとまず帰らない。東京に住む。で、だからふるさと回帰の中のIターン、Jターンの人たちに打って出ようと思ったら、ここ出身の人たちを、どうやって探し込めるかっていうのが一つのキーワードになります。

で、若者にIターン、Jターンでこの地域に帰ってきてても、なんか人口減少問題になってきたな。

まあ、そういうふうなキーワードがあるってことを最近学びました。いろんなことで、この地域の活力が高まってくるといいなと思いますけども、ただ不安、それから不安と、不便と不安とイメージがある。イメージは負のイメージですね。この三つをどうやって少しでもプラスにできるかを考えるのと同時に、いいイメージをどれだけ出せるかっていうことを考えたら、力のある地域になれるかなっていうふうに思っていました。以上です。

○鈴木誠委員長 はい、どうもありがとうございました。

今、副市長から考えていただいたことも、きょう両方ですねテーブルで議論されたことと通じるものが随分ありました。

さあ、それでは、これ以降はですね、事務局のほうに今度はお返しをいたしますので、よろしくをお願いします。

○司会 ありがとうございました。

今年度ですね、4回という形で、終了させていただくということになるかと思います。3月もという話もございましたけれども、なかなか忙しい中ですね、3月という部分では、会議を持つにしても、こんなに大勢の方たちにお集まりいただくのは、なかなか難しいのではないかということで、来月のかな、

4月の話をさせていただきたいと思っております。

この委員会のメンバーの方は、委嘱状にも書いてありますとおり、来年度の答申をいただくまでという形を考えておりますので、済みません、委員長とも相談をさせていただいて、4月ですね、21日か22日の日に、もう既に次の委員会を開こうということで、調整をさせていただいておりますので、時間的にもですね、できれば、3時ぐらいから5時ぐらいにかけてという形で調整をさせていただきたいというふうに思います。

この4回の会議のまとめという部分ではですね、鈴木誠委員長と事務局のほうで、またまとめをさせていただいて、皆様のところにどんなことで御発言をいただき、こういう形のまとまりをしたかということを知るような形で文章化させていただこうというような計画を、3月のときにしようということでさせていただきましたので、またそのあたりもですね、4月の段階では、それを見ていただきながら、次のステップという部分の内容を、より条例の条文であったり、文言であったというようなところに、少しずつ近づけていく努力をさせていただきたいというふうに思っておりますので、4月21か22の日で、また日程調整をさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いをしたいと思っております。

今年度につきましては、これで終了という形にさせていただきますので、今年度の分、大変お忙しい中、本当にきょうについては夜の部分の会議という形、夕方から夜という形で、大変お忙しい中恐縮でございましたけれども、今回で、今年度の審議会のほうは終えさせていただくという形でさせていただきますので、きょうは本当にありがとうございました。